放送大学研究年報　第36号（2018）41-69頁
Journal of The Open University of Japan, No. 36（2018）pp. 41-69

放送大学の地域貢献機能
―学習センター・サークルのネットワーク分析を手がかりに―

河　合　明　宣[1]・吉　田　瑞　樹[2]・川　島　英　昭[3]

How does The Open University of Japan contribute to Communities?
―through Social Networking Analysis of Circle Activities at the Study Centres ―

Akinobu KAWAI, Mizuki YOSHIDA, Hideaki KAWASHIMA

要　旨

2011年６月に発足した第６期中央教育審議会生涯学習分科会では、「生涯学習社会の構築」について審議し、その「議論の整理」に放送大学は、「社会人の学び直しの機会として時間的・空間的制約がなく学ぶことのできる大学等」と明記された。これを背景に、2013年に発足した本学の地域貢献研究会は１年間の議論を以下のように要約した。

「放送大学が従来より行ってきた教育事業を通して、教育や学びを通じた①地域人材の育成、及び②地域の活性化を成し遂げるといった２つの方向性こそが本学の目指すべき課題だと考えられる。」。②が「地域貢献の実践部分」であり、各学習センターの取り組みそのもので、既に社会や地域で活躍している社会人層が大半を占める本学の多くの学生が既に実践している。

この本学の特徴を強化し、地域リーダーまであと一歩の学生の背中を学びを通して後押しし、地域貢献への参加と結びつけることが重要となってくる（同プロジェクト報告）。

本稿は、「地域貢献の実践部分」を地域に関連する面接授業の分析と、サークル活動が学びを社会貢献活動に結びつけ、地域の担い手に育つ過程の把握を目指した事例研究である。

ABSTRACT

The Open University of Japan（OUJ）provides opportunities for students from various background to study at their own place without leaving their own offices or homes, and aims to be a place where students can obtain a degree for general education or advanced studies.

From the lifelong-learning point of view, almost all students live at their own houses and maintain neighborhood relationship in their communities. All students belong to Study Centres（SC）where face-to-face class sessions and other educational facilities are provided. SC becomes venues for students to hold circle activities（extracurricular activities）and friendly exchanges. OUJ has 50 SC in every prefecture, 7 Satellite Spaces and 64 Audio visual Rooms for giving easier access. These infrastructures provide huge scope for lifelong-learning together with broadcasting learning materials.

This study aims to explore the potentialities of OUJ to contribute local communities through SC's functions.

はじめに　　河合明宣

2014年文科省科学技術・学術政策研究所が全国の高等教育機関1177校を対象にした調査から、大学等の地域連携活動の状況や課題が明らかになる（野澤：３-４）。この調査の有効回答率は75.0％であった。

大学による地域連携の取り組み状況を見ると、複数

[1] 放送大学教授（「社会と産業」コース）
[2] 本学修士修了生
[3] 本学修士修了生、本学TA

回答で「公開講座の開講」(92.5%)、次いで「学校で開催される講演会、社会教育事業への講師派遣」(83.9%)、「社会・地域問題への対処や地域活動への教職員・学生の参画」(74.9%)が多い。教育機能面での活動が比較的高い割合を示している。その中で質問「一番注力しているもの」に対して、「社会・地域問題への対処や地域活性化活動への教職員・学生の参画」(16.5%)、「連携協定に基づく自治体との連携事業への教職員・学生の参画」(9.6%)、「公開講座の開催」(9.5%)の順となっている。

地域連携活動の主たる活動対象地域は、大学等から見た場合、半数以上が所在地市町村および近隣市町村と比較的狭い地域での活動が中心になっている。従来、地域社会の外にいた大学は、学内で開催する「公開講座」への市民参加か、所在地か近隣の自治体との包括協定等を締結して自治体事業への教職員・学生の派遣という形になっていた。

放送大学の地域貢献と通学制高等教育機関との違いは、「学生は職業人であり地域住民である。本学は地域社会で重要な役割を果たすことができる人財を多数擁している。」(宮本 2014)点にある。

1. 放送大学における地域貢献活動の見える化

1) 学長裁量経費による地域貢献プロジェクト

学長裁量経費による「地域貢献プロジェクト」は、平成26年度から平成30年度の間で、毎年20件程度が採択されている。報告書を公表しているプロジェクトも存在するが、所定の様式での報告は採択されたプロジェクト全てが本学HPで閲覧できる。本稿で、内容についての考察を意図したが紙数の都合により別稿で果たしたい。

2011年6月に発足した第6期中央教育審議会生涯学習分科会では、「生涯学習社会の構築」について審議し、「第6期中央教育審議会生涯学習分科会における議論の整理」を公表した。放送大学は、「社会人の学び直しの機会として時間的・空間的制約がなく学ぶことのできる放送大学等」と、その役割が明確に述べられている。こうしたことを背景に放送大学は、岡部学長を座長にした「地域貢献研究会」を2013年に設けた。初年度報告書は、放送大学学習センター支援室・総合戦略企画室編『地域貢献研究会における議論と学習センターのプロジェクト報告　2013年度』(放送大学学習センター支援室・総合戦略企画室)として公表された。そこで学長は、「報告書のはしがき」で次のように述べている。

地域貢献事業推進は、「本学の強みである以下の3点を活かして行くことであると述べている。即ち、1)全国に展開する知の拠点(50か所の学習センター、7か所のサテライトスペース)。2)即戦力のある人材(約9万人の社会人学生とそれをサポートする880人以上の学習センター教職員。3)強力な教育情報システム(全国に展開する放送授業・面接授業・公開講演会など)」。

放送授業と面接授業とが教育の中心で、全国一律の単位認定試験実施及び学習拠点となる全国に展開する各学習センターのもと約9万余人の社会人学生が学んでいる。

報告書における学長メッセージには、「本学の調査によれば、その中に既に地域のリーダーとして活躍中の人たちが多数おられます。2013年度は、本学の学習センターが中心となりこれらの人たちの活動を支援し、さらにそれに続く新しいリーダーを養成するために、地域のニーズに応える21件の地方貢献プロジェクトを立ち上げました。」と、地域学習センターが地域貢献活動の推進の現場であると述べている。

2) 生涯学習分科会

上述生涯学習分科会の「生涯学習社会の構築」では、「生涯学習社会の構築」の中心的な役割を担う社会教育行政の今後の推進の在り方について、集中的に審議を行った。そして、2012年1月に審議内容を「第6期中央教育審議会生涯学習分科会における議論の整理」として取りまとめた。そこで放送大学に対する期待として次のように述べられている。

「地域における課題解決に向けた学習の重要性を踏まえ、地方公共団体や他大学等とも連携し、少子高齢化、防災、環境、健康等の課題に対応した科目の充実、地域リーダー育成等のために学習センターを活用した公開講演会等の充実を図ることも望まれる。(略)

2013年6月14日に第2期教育振興基本計画が閣議決定された。その中では、社会人の学び直しの機会として時間的・空間的制約がなく学ぶことのできる放送大学等の科目の充実等が記述されるなど、放送大学に対する期待は大きくなっている。そこで次のような要請がある。(略)テレビ・ラジオ放送による授業を実施し、各都道府県に学習センターを設置している等の特性を有する放送大学が、地方公共団体や他大学等と連携した授業科目や公開講演会等の充実を図り、社会人等が学びやすい学習環境を整備することを促進する。」(同プロジェクト報告:1-2)。

こうした要請のもとで学長の目標となっている「アクションプラン2012」(2012年5月策定)は、地域貢献を次のように重点目標化した。

「学習センターを地域の生涯学習の拠点として位置づける。学習を支援する場としてのみならず、地域の人々の『居場所』として、学習センターが役割を果たすべく、広い視座に立って面接授業、公開講演会、研修旅行などの活動を企画するとともに、地域との連携を図るサークル活動なども支援する。さらに、豊かで暮らしやすい社会、多様な人々が共生できる社会の形成に取り組める地域リーダーの育成支援にも努力するなど、超高齢社会における本学習センターの新たな役割を模索する。

(略)学部と修士課程において、地域・職場等の具

体的諸問題に取り組む実践的課題解決に資する能力開発と研究の機会を提供し、成果を上げてきた。その基盤の上に、博士課程を設置して地域社会・職場等の課題解決をリードする中核的な社会人研究者を育成し、質の高い地域貢献を図るものである。」（同プロジェクト報告：２-４）。

地域貢献研究会の１年間の議論のまとめは以下である。

「放送大学が従来より行ってきた教育事業を通して、教育や学びを通じた①地域人材の育成、及び②地域の活性化を成し遂げるといった２つの方向性こそが本学の目指すべき課題だと考えられる。」（同プロジェクト報告：７）。

「①は、放送を通じて全国の関心を持っている人達に共通の知識を提供できる手段があり、全国を対象としたある種の地域貢献を実施することが可能なのである。（略）。放送大学の本部に期待されている役割とは、まさにこの理論的な活動であり、放送大学における地域貢献活動を理論的に位置づけ、各学習センターの取り組みを整理し、放送等の手段を使って全国に発信していくことが求められていると考える。（略）

②について、「地域貢献の実践部分」では、まさに各学習センターの取り組みそのものであり、また、すでに多くの学生が実践しているのである。放送大学の学生は既に社会や地域で活躍している社会人層が大半を占めており、20歳前後の学生がほとんどを占める一般の大学とは、学生の質が大きく異なる。この特徴を強化し、地域リーダーまであと一歩のところの学生の背中を学びによって後押しすることで、地域貢献への参画へとつなげることが重要となってくるのではないかと考える。」（同プロジェクト報告：７-８）。

こうして学長裁量経費により応募した学習センターで地域貢献プロジェクトの成果報告書が作成された。

3）生涯学習と社会的課題の解決

地域貢献は、生涯学習に込められた次の課題に沿っている。OECD（経済協力開発機構）の教育研究革新センターでは世界の変化に対応する教育を提言している。ポール・ラングランは第二次世界大戦後ユネスコにおいて生涯教育論の提唱者となった。彼は次のように考えた（立田：133-134）。

「生涯教育」のシステムとして、「水平的統合」と「垂直的統合」によって成り立つ教育システムを考えた。

「水平的統合とは、家庭教育、学校教育、学校外教育、成人教育だけでなく、社会が持つ多様な教育機会を生涯教育の原理の下に調整を図り、生涯教育の目的、方法、内容において統合的な整理と再構成を行うことである。これに対し、垂直的統合とは、これらの多様な教育機会を利用しながら、学習者個人のレベルにおいて、その発達過程における一人の人間存在としての完成を目指すものである。垂直的統合が時間的な統合であるとすれば、水平的統合は空間的な統合を意味する。」

経済やテクノロジーが大きく変化し、グローバル化の中で各国は影響を蒙るようになった。こうした状況下で、教育の領域では変化を受けた諸領域から大きな影響を受ける一方、教育の変化自体が他の領域に大きな影響を与えるという相互作用が注目されている（立田：131）。生涯学習者が多様な社会的課題に関心を持ち、関心を持ったものが社会的課題に影響を与えるといえる。放送大学の社会的貢献は、こうした文脈で捉える必要がある。

放送大学の学習の場は学習センターである。「生涯教育」の「垂直的統合」によって成り立つ教育システムは、「水平的統合」の観点から言えば、学習センターでの学生同士の交流がサークル活動の形で始まり、センター内外での多様な教育機会を利用しながら、学習者個人のレベルにおいて、その発達過程における一人の人間存在を形作っている。30年余の活動歴を持っているサークルも存在している。

学習する科目数に応じた授業料納入制のもとで３つの学生種を選択しながら長期に在学する学生が大半であるといえる。センターでの学習とサークル活動の交流を通しての多様な経験が交叉し、その積み重ねの中で、個別な学習者は、時間経過に沿って「生涯教育」の「垂直的統合」を鮮明に意識していく。

ユネスコの生涯学習論は、生涯学習の４つの原則を提示している。それらは、時間軸に沿った人間の存在の形成である。1）知ることを学ぶ（learning to know）、2）なすことを学ぶ（learning to do）、3）ともに生きることを学ぶ（learning to live together）、4）人間として生きることを学ぶ（learning to be）、である。

1996年刊行した『学習：秘められた宝』において「ともに生きることを学ぶ」が加わった（立田：183）。

放送大学及び学習センターにおける「生涯学習」の「垂直的統合」という観点から何故、学生は地域貢献に向かっていくのか。能動的学習が生涯学習の４つの原則の階層を押し上げて行くことを、放送大学システムからの説明を試みる。

通学制大学とは対照的で、学習センターにおける地域貢献活動では、放送大学生は生活する地域の住民であるという特性が引き出される。前者では、学内開催公開講座を地域住民に公開するか、大学所在の自治体施設での出前講座の開講が一般的である。どちらの場合でも、講師のみが地域住民に対して知識を伝える。しかし、例えば、埼玉SCで見たように地域発展事例を牽引している当事者に面接授業講師を依頼するセンター外の面接授業では異なっている。この面接授業では、学生が地域＝現場に出向いて、現場の当事者から発展事例のプロセスを学ぶのである。普通、地域住民が関心を持ってもそうした事例の発展プロセスを見聞

するのは難しい。センター外の面接授業は、学生と地域とを「橋渡し」している。一方で、それはユネスコ生涯学習４原則第２「なすことを学ぶ」(learning to do）ことである。

センター外の面接授業が開講されるまでには、学習センター所長や同窓会やサークルで能動的に活動する学生の持つ人的関係が重要な役割を果たした。学習センターにおけるサークル活動を通してネットワークがいかに形成されるか、愛知学習センターが学長裁量経費で実施した地域貢献プロジェクト成果を基に考察する。

2. 放送大学の地域貢献に関わる面接授業 ―2017年度センター外面接授業と2018年度１学期における地域関連授業の基礎的データ作成―

川島英昭

2-1. 2017年度の学習センター外面接授業

2011年の「地域特性を生かした野外面接授業に関するデータベース作成およびその評価資料」(以下「2011年評価資料」)[注1]作成後、現在の学習センターの面接授業が地域にどのように関わっているかの基礎的データの作成と報告は次の通りである。

放送大学の学習センターで企画・運営する面接授業は、地域固有のテーマが選ばれてきている。地域を知り、地域固有の課題に対して考察を行う面接授業が多くなっている。2011年の報告では学習センターの外に出ることで、直接に地域と関わりを持つ野外面接授業が、地域にどのように影響を与えているかを考察するための基礎的データの収集と予備的な考察を行った。今回の報告はその後の野外面接授業がどのように変化したのかについて、2011年度と同様の項目で2017年度のデータベース作成を行った。さらに2017年度のセンター外面接授業[注2]と2018年度１学期について全国の学習センターで行われた面接授業について、地域に関する面接授業を抽出して地域に対する関わり方の分類、評価を行った。

1）2017年度の学習センター外の面接授業の抽出

『面接授業開設科目一覧』をもとに抽出した放送大学における全国の学習センターの2017年度の面接授業の総数は3266授業であった。実際に地域に出ている面接授業をセンター外面接授業として抽出し分類を行った。

1）本研究におけるセンター外面接授業の定義は以下の通りである（『面接授業開設科目一覧』の「学習センター以外の場所で行う面接授業」抽出とは異なることに留意)。

①学習センター及びサテライトセンター（以下両者を一括して学習センターと呼称する）以外の場所で行われる正規の授業（単位習得面接授業）

②学習センター以外であっても単に学習センターの講義室の代替として使用される講義は除外した。

③学習センターが他の大学の敷地内にある場合は、同敷地内の大学施設で行われる授業は除外した。

④上記の③の場合でも特別な施設、器材、環境、森林、農場などを内容とした授業は学習センター外面接授業として集計した。

⑤しばし面接授業に使用される他の機関の施設の場合[注3]、特別な器材等を使用する授業はセンター外面接授業とした。

2）面接授業の抽出は各ブロック別に作成されている2017年度１学期及び２学期『面接授業時間割表』をもとに作成した。

3）学習センター外の面接授業を下記の方法で科目区分と授業形態の分類を行った。

(1）どのような科目区分がセンター外面接授業に多いかについて、授業の内容に即して科目区分を行った。『面接授業時間割表』の記載区分ではなく、『面接授業時間割表』の「授業内容」、「講義テーマ」の内容を読み取り、①自然系、②人文系、③社会系、④体育系と、その複合系である⑤自然・社会、⑥自然・人文、⑦社会・人文の７つに分類した。

(2）授業の形態を明確にするため、フィールド系と施設内系[注4]の２つに分類[注5]した。

2）2017年度の学習センター外の面接授業の現状

2017年度の学習センター外の面接授業は**表２－１**の通りである。１学期95授業、２学期89授業の合計184授業であり、全授業に占める割合は5.6％であった。全授業数は１学期1621授業、２学期1645授業と総数でほぼ同じである。2010年度の面接授業総数2602に対して2017年度の面接授業総数は3266で増加率は約125％である。学習センター外面接授業数では2010年度の91に対し2017年度では184であり増加率は約200％と倍増している。2010年度に実施していた学習センターのセンター外授業数が増えたと共に、新たにセンター外面接授業を実施した学習センターが増えた点も挙げられる。2010年度で野外面接授業を行っていた学習センタ

注1「2011年評価資料」は学長裁量経費研究として、2010年度の全国の学習センター以外で行われる面接授業を抽出し、学習センター別、科目分類､野外型か施設型かなどの分類集計と現状評価を行った。また埼玉学習センターでの野外型面接授業である「秩父学」を企画した黒澤英典武蔵大学名誉教授と当時の毛利信男埼玉学習センター長に「秩父学誕生を語る」のテーマでインタビューを行った。

注2「2011年度評価資料」では野外面接授業の用語を使用したが、本報告では『面接授業開設科目一覧』に揃えセンター外面接授業の用語を使用する。

注3 鹿児島学習センターの奄美会場と沖縄学習センターの石垣会場はセンター外面接授業として集計した。

注4 フィールド系はもっぱら野外の観察等を行うもので、町並みの視察や遺跡見学も含まれる。施設内系は建物内で見学および座学を行うもの。

注5 ひとつの授業の中でフィールドと施設内を行うものは授業内容から、どちらが授業の主となるかを判断した。

ーは39に対して、2017年度では48と増加している。この間の推移はセンター外の面接授業の要望が多くなっていることを示している。

3）センター外面接授業で授業数の多かった学習センター

1）１学期では９授業の千葉、５授業の東京多摩、神奈川、和歌山、鹿児島であった。
2）２学期では９授業の神奈川、６授業の大阪、和歌山、５授業の埼玉、千葉、京都であった。
3）年間では14授業の千葉、神奈川、11授業の和歌山、10授業の大阪であった
4）学習センター間で面接授業の開催総数が大きく異なることから、学習センター外面接授業率も算出した。年間での学習センター外面接授業率が20％以上のセンターは和歌山26.8％、山梨20.6％、鹿児島20.0％であった。
5）開設が早い南関東、北関東の学習センターでセンター外面接授業が多い。同時にBS放送による全国化以降の学習センターでも、2010年当時から実施している学習センターの授業数は多い。センター外面接授業の開催については長期的な継続性が見られる。

4）分類の側面（科目区分・授業形態）

科目区分では**表２－１**のように自然系、人文系の二つで１学期、２学期とも80％あまりを占めている。社会系が１学期、２学期とも７％前後で、そのほかは授業数自体が４から１である。

科目区分の授業数で１学期と２学期の推移をみると以下の特徴がみられる。自然系は１学期では38授業であり全体の40％を占めるが、２学期では27授業であり全体の30.3％に実数、構成比とも減少している。一方、人文系では１学期は39授業41.1％で自然系とほぼ同数だが、２学期では49授業55.1％と実数、構成比とも増加する。なお他の科目は実数が少ない点もあり大きな変化は見られない。

また、**表２－２**のようにフィールド系と施設内系の分類では１学期、２学期ともほぼ２対３の構成比で、施設内系が約６割を占めている。この傾向は2010年度の45％と55％の割合と大きな違いはない。

表２－１　2017年度学習センター外面接授業数（科目区分分類）

	１学期		２学期		年間	
区分	授業数	％	授業数	％	授業数	％
自然系	38	40.0	27	30.3	65	35.3
人文系	39	41.1	49	55.1	88	47.8
社会系	7	7.4	6	6.7	13	7.1
体育系	4	4.2	3	3.4	7	3.8
自然・人文	3	3.2	2	2.2	5	2.7
自然・社会	3	3.2	1	1.1	4	2.2
社会・人文	1	1.1	1	1.1	2	1.1
合計	95	100	89	100	184	100

表２－２　2017年度学習センター外面接授業の形態分類

	１学期		２学期		年間	
区分	授業数	％	授業数	％	授業数	％
フィールド系	38	40.0	32	36.0	70	38.0
施設内系	57	60.0	57	64.0	114	62.0
合計	95	100.0	89	100.0	184	100.0

2-2. 2017年度におけるセンター外面接授業の地域に対する関わり方

2017年度ではセンター外面接授業がどの程度地域に関わっているかについて、授業の内容を『面接授業時間割表』の記載事項を読み込むことで関わりの分類を行った。

1）地域への関わり方はどのようなものなのか

学習センターにおけるセンター外面接授業は、当該センターの地域に直接関わることになり、必然的に地域と連携した面接授業となる。しかし連携の具合は面接授業ごとに異なる。単に会場や施設・設備を借りる場合から、当該地域で実際に取り組みを行っている人々を講師に迎え、現場を見学し実習する授業まで内容は様々である。そこで授業ごとに地域への関わり具合を分類して数値化を行った。

2）分類方法

抽出した2017年度センター外面接授業について『面接授業時間割表』に記載の授業概要による「授業テーマ」、「学生へのメッセージ」を読み込み下記の３種[注6]に分類を行った。

①A型　学習センター所在地域の具体的諸問題に対する実践的課題解決に資することを内容としている授業
②B型　学習センター所在地域について、その地域に関する具体的諸問題を内容としている授業
③C型[注7]　A型、B型以外の授業（学習センター外の施設を利用して一般的な地域に関する事柄を内容にしている授業、学習センター外の施設を利用するが地域に直接関わらない内容の授業）

3）分類の結果

全国の学習センターの集計を基にその内容を科目区

注6　分類は地域における授業テーマの絞り込み（関わり方）について分類しているのであって、内容の深さや詳しさを分類しているものではない。

注7　C型は地域をテーマにせずに施設だけを利用する授業も含まれている。しかし地域の特色ある施設を利用するということは施設の関係者と交わるであろうし、その場所に訪問すること自体も地域の関わりを持つことになる。施設のみ利用も間接的に地域に関わりがある授業として数値に取り入れた。さらに2017年度のデータ抽出は2010年度のデータの比較も前提にしているので、2010年度との整合性をとるため地域項目に絞った抽出は行わなかった。

表２－３　センター外面接授業の地域への関わり方分類

区分	総数	自然	人文	社会	自然・人文	自然・社会	人文・社会	体育
A型	10	1	1	3		2	3	
B型	62	16	41	2	2	1		
C型	112	48	46	6	3	1	1	7
総計	184	65	88	11	5	4	4	7

分ごとの地域の関わり方を分類したものが上記の**表２－３**である。

C型の授業が全体の60％を占めている。これは集約範囲の広い定義が要因である。しかし人文系ではB型が41とC型の46に対して授業数の差異が少ない。人文系の歴史、文化については、建造物や史跡、博物館など各地に多数存在することにより地域との親和性が高く、当該学習センターにおける地域性を持った授業が行えるのではないか。今後、地域の人文的な施設や事柄をテーマにすることで、要望が多くなっているセンター外面接授業を増やすことができる。

一方、個別の事例をテーマにしているA型では実数では10授業と少ないが、科目分類でみると社会系と社会系が絡んだ科目が８となり大半を占めている。B型、C型と異なる傾向がみられる。

個別の事例などテーマを絞り込んだセンター外の面接授業の傾向は面接授業全体にもいえるのか。この点ついて、以降の節で2018年度１学期の地域関連授業のデータ作成により詳しく評価を行う。

2-3. 2018年度１学期における放送大学の面接授業はどのように地域に貢献しているのか

「地域再生の核となる大学づくり」において放送大学はどのような取り組みが出来るのであろうか。学生の大半が社会人の放送大学は、一般の通学生の大学以上に地域と密接な関わりを持っている。多くの学生は地域のフォーマル、インフォーマルに関わらず何らかの団体、組織に関わっていると理解できる。放送大学の各学習センターでは地域に貢献する学生に活用できる授業を提供しているだろうか。本節では前節の2017年度より対象を広げて、全国の学習センターの面接授業を対象にした。学生が直接授業を通じて知識、知見を得ると思われる地域関連の面接授業を『面接授業開設科目一覧』と『面接授業時間割表』をもとに抽出してデータ化を試みた。また前節2017年度のデータ化で明らかにした、地域の個別の取り組みに関するセンター外面接授業の特質が2018年度の地域に関する面接授業でも同様の傾向を示すかの確認を行った。

1）地域関連の面接事業の抽出

2018年度１学期における全国の『面接授業開設科目一覧』をもとに「地域」「地方」および学習センターの当該「地域の地名」をキーワードにして地域に関する面接授業を抽出した。その上で抽出した面接授業が地域に関連しているかを、ブロック別の『面接授業時間割表』の「授業概要」の読み込みを行い、再度の抽出を行った。なお抽出の定義は下記による

①内容が直接当該学習センターの地域に関わっている面接授業
②内容が直接的ではないが地域に関わりを持っている面接授業
③当該学習センター地域の特色のある施設を使用して行う面接授業
④授業科目名と内容から地域を関連させる面接授業

2）地域関連の面接授業の分類

抽出した面接授業はどのような科目区分が多いのか、また地域との関わり方はどの程度なのかを分類した。『面接授業時間割』の科目区分はコースによる分類であり、授業内容と必ずしも一致していない。そのため『面接授業時間割』の授業概要を読み込み、①自然系、②人文系、③社会系と、その複合系である④自然・社会、⑤自然・人文、⑥社会・人文の６つに分類した。地域への関わり方についても2017年度同様に『面接授業時間割表』の「授業概要」の記述から「授業テーマ」、「学生へのメッセージ」等を読み込み３種に分類を行った。

①A型　学習センター所在地域の具体的諸問題に対する実践的課題解決に資することを内容としている授業
②B型　学習センター所在地域について、その地域に関する具体的諸問題を内容としている授業
③C型[注8]　一般的な地域に関する事柄を内容にしている授業（学習センターの所在する地域をテーマとしない内容の授業も含む）

3）全国の学習センターの状況

上記の方法で抽出した2018年度１学期の地域関連の面接授業数は123であった（**表２－４**を参照）。実数の多い順に埼玉学習センターの14、和歌山学習センターの９、神奈川学習センターの６となった。関係する授業が無い学習センターもあり、実数において学習センター間の差が大きい。

科目別の分類は人文系が54授業で43.9％、自然系が30授業で24.4％、社会系は23授業で18.7％となった。人文系が地域との親和性があることはここからも読み取れる。

社会系の授業は2017年度のセンター外面接授業の数値より高くなっている。この要因は通常の面接授業を対象にしているので、センター外面接授業では実施が難しかった概念や制度の講義型の社会系授業も抽出したことによる。

抽出方法が異なるので2017年度と2018年度とを一緒にして論じることはできないが、傾向としてセンター外面接授業が多い学習センターは地域関連面接が多いことが読み取れる[注9]。同時に学習センターにおける地

注8　このC型については2017年度と違い地域に関連する授業のみである。

表２－４　2018年度１学期における地域関連面接授業の科目別分類

	総数	自然	人文	社会	自然・人文	自然・社会	人文・社会
地域授業	123	30	54	23	5	9	2
SC外授業	53	20	21	4	4	2	2
SC外率	43.1%	66.7%	38.9%	17.4%	44.4%	22.2%	100%

表２－５　地域関連面接授業の地域への関わり型分類

	総数	自然	人文	社会	自然・人文	自然・社会	人文・社会
A型	7		1	2		2	2
B型	56	9	34	8	3	2	
C型	60	21	18	13	3	5	
合計	123	30	53	23	6	9	2

表２－６　A型の地域関連の授業

センター名	科目名	内容	科目区分
○群馬	**国有林野の生物多様性復元事業**	群馬県みなかみ町赤谷川流域の調査他	自然・社会
埼玉	**秩父の祭り**	（後述の埼玉学習センターの取り組みを参照）	人文
○埼玉	**和光市に見る地域包括ケアの実務**	上に同じ	社会
○埼玉	**公共劇場の役割と地域社会**	上に同じ	人文・社会
○埼玉	**映画と地域づくり　映画の可能性**	上に同じ	人文・社会
千葉	人口減少時代の千葉の地方創生	人口減少期を迎えた日本の現状を把握し、原因、課題、影響を学び、危機意識を共有する。地方や大学、企業等が進める取り組み、大学連携型生涯活躍のまち（長柄町）、横芝光町のまちづくり戦略	社会
○鹿児島[注12]	世界自然遺産と観光（奄美市）	世界遺産登録により持続的可能性の高い地域振興が可能か、世界遺産を取り巻く地域振興パターンについて理解を深める。	自然・社会

注：センター名の前の○はセンター外面接授業を指す。科目名の太字は前年も同じ内容の授業が行われていたものを指す。

域関連の面接授業の取り組みは連続する傾向がみられる。

地域関連授業におけるセンター外面接授業数は**表２－４**、**表２－５**のようになった。地域関連授業におけるセンター外授業では自然系のセンター外面接授業率が高い。この傾向は2017年度の場合と同じである[注10]。2017年度と同様で、自然系と人文系で大半を占めるのは、自然現象や環境に関する自然系、遺跡や文化財、博物館などを利用する人文系は、実物を見ることでより理解が深くなる。それゆえにセンター外に出て訪問すると考えられる。一方、社会系では2017年度と同様に低い数値となる。

4）地域関連面接授業の取り組み分類の結果

この中では人文系のB型が実数で一番多くなっている。2017年度のデータ評価のセンター外面接授業と同様の要因でB型が多くなると考えられる。一方、社会系は地域関連授業におけるB型の実数はあまり多くない。この点はセンター外授業と同じ要因で、概念や制度を学ぶ内容が多い社会系では個別の地域事例ではなく、地域一般をテーマにする授業が多くなると考えられる。

一方、A型においては2017年度のデータ評価と同様な傾向を示している。そこでA型においては授業別に内容を含めた詳細なデータ評価を行うことにした。

5）個別の取り組み事例　A型の面接授業

地域関連の授業の中で個別事例や取り組みを授業に取り込んだA型[注11]の面接授業はどのような授業なのか、７つの授業の科目名や内容は**表２－６**に表示した。実施の学習センターは群馬、埼玉、千葉、鹿児島の４センターである。このうち埼玉は４授業を実施している。

A型は７例のうち１例を除き社会系にも関係している。前節での評価と同様にB型、C型とは明らかに科目区分が異なる。地域の個別事例に対する実践的課題解決をテーマにすることは、何らかの社会性を持つことになるので社会系が絡んだ区分が多くなる。社会性を持つ個別課題を授業に取り入れるには、詳細な現場の知識が不可欠になる。個々の地域課題に継続的にかかわっている人が講師、授業のアドバイザー等の必要性が生じる。すなわち地域の個々の課題にテーマを絞った面接授業を行うには、地域で活動を行っている人々と放送大学が関係を持つ必要がある。

そのような関係を作りどのように取り組むのか。以下、地域関連の面接授業が最も多い埼玉学習センターについて個別に取り上げる。

注9　センター外面接授業は地域との関わりを持つので、センター外面接授業は地域関連授業と同一となる可能性は高い。しかし他年度間は同じ授業ではないので学習センターの傾向は読み取れる。

注10　あくまでも一つの仮説であるが、１学期は春から夏にかけて行われるので気候が良く、自然系における野外型の授業には向いていると考えられる。

注11　A型の抽出は『2018年度第１学期　面接授業開設科目一覧』の科目名から地域に関するキーワードをもとに選びだしたものであり、当該内容に関する面接授業のすべての抽出ではない。

注12　この授業は鹿児島学習センターの奄美会場で行った。

表２－７　埼玉学習センターの地域関連面接授業（A型、B型）

科目名	講義内容	分類
戦争に至る時代の埼玉の諸相	埼玉の小作争議、小川和紙と風船爆弾	社会、B型
埼玉県北部の祭り	県北部の祭りと周辺地域との関わり	人文、B型
秩父の祭り	秩父の様々な祭りの事例紹介と現状把握、今後の展望	人文、A型
秩父の甲源一刀流	秩父で生まれた甲源一刀流の全体像の検証	人文、B型
○埼玉の民俗　川と暮らし	荒川と中川水系の人と川の関わり	人文、B型
埼玉ゆかりの偉人２	実業家渋沢栄一と造林学、造園学の基礎を築いた本多静六を学ぶ	人文、B型
○和光市に見る地域包括ケアの実務	和光市の高齢者福祉政策の要諦を実務に即した講義、現地観察による現状の把握	社会、A型
○公共劇場の役割と地域社会	公立施設・彩の国さいたま芸術劇場の役割と課題	人文・社会、A型
秩父から学ぶ郷土学　自然と風土	ジオパークと秩父	自然・人文、B型
○映画と地域づくり―映画の可能性	コミュニティ・シネマやフィルム・コミッションの活動、深谷シネマ座と川越スカラ座の現場の声、映画界が抱える課題	人文・社会、A型

注：科目名の冒頭にある○はセンター外面接授業を指している。

2-4. 埼玉学習センターの面接授業

1）埼玉の地域に関する面接授業

2018年度１学期の地域関連の面接授業A型では埼玉学習センターが最も多い。同時に地域関連授業全体でも14授業と最多である。そこで学習センターの所在する地域（埼玉県）に関する事象を内容としたA型とB型[注13]の10授業に絞り、埼玉学習センターでは地域関連の授業をどのように行っているかを、**表２－７**に個別に表示した。

10授業のうちセンター外で行われる授業が４授業であり、2018年度１学期のセンター外面接授業は４授業すべてが地域関連授業であった。前年のセンター外面接授業数では１学期は４授業すべてがA型・B型の地域関連授業、２学期も５授業の内２授業がA型、B型の地域関連授業であった。センター外面接授業においても積極的に地域に関わる面接授業を行っていることがわかる。

2）埼玉学習センターの地域関連面接授業の取り組み

面接授業を科目名から見ると、秩父を中心にした文化的な関わりを持つ授業と、公共的なテーマを中心とした行政と関わりを持つ授業に分けられる。この点から地域関連の面接授業は課題解決指向をもって組み立てられていることがわかる。

この点については埼玉学習センターでは、実際どのような取り組みをもって地域関連の面接授業を行っているか、2018年10月４日と18日の２回にわたり埼玉学習センターの渋谷治美所長にインタビューを行った。

埼玉学習センターでは[注14]先々代の毛利所長の当時から武蔵大学名誉教授黒澤英典氏の「秩父学」をもとに、秩父の文化や自然をテーマにした面接授業やセンター外面接授業を継続して行ってきた[注15]。現在の渋谷所長が2015年着任後は、ワーキンググループを作りこの取り組みを発展させ、面接授業の分野に「埼玉ふるさと学」として位置づけている。ワーキンググループは黒澤氏を座長に渋谷所長他５名の講師で構成され、毎年面接授業のテーマや内容の討議を行っている。その内容をもとに「導入科目　人間と文化」の科目として毎年度複数の授業[注16]を行っている。

一方、埼玉県の埼玉芸術文化振興財団と連携を図り、財団が運営する「彩の国さいたま芸術劇場」による企画で芸術をテーマにした面接授業[注17]を継続して行っている。埼玉県行政と放送大学とがWin-Winの関係を築いている。同じような行政との連携には「和光市に見る地域包括ケアの実務」がある。和光市との連携には市長の松本武洋氏が放送大学大学院修了生であることがあげられる。この授業も2015年度より連続して行われている[注18]。

埼玉学習センターの地域関連面接授業は、渋谷所長のもとで複数の方向性を持って組み立てられている。一つ目は「埼玉ふるさと学」という方向性を明確にした分野である。この分野は過去の「秩父学」の面接授業の取り組みを引き継ぎ、長期的な継続性を持たせている。さらに、秩父地域から埼玉県圏域にと広域化している。内容についても埼玉の歴史、文化、風土と広がっている。二つ目は行政との連携の上に企画された授業である。埼玉芸術文化振興財団との連携による劇場や映画という芸術をテーマにした複数の総合科目としての授業がこれに当たる。和光市の例もこれに当たる。

実際の授業はどのように行われているのか。以下、

注13　埼玉学習センターの傾向を見るため、B型は地域（県域）における事象を内容としていることから対象とした。
注14　インタビューの内容をもとに取り組みを要約したものである。
注15　「秩父学」の取り組みについては前出「2011年評価資料」の黒澤氏とのインタビューに詳しい。
注16　表２－７の２段目から６段目までの５授業。
注17　表２－７の８段目と10段目の２授業。
注18　和光市では市立図書館内に放送大学再視聴施設和光校を設置し、放送授業の視聴が可能な取り組みを行っている。

行政との連携でありセンター外面接授業である「和光市に見る地域包括ケアの実務」の事例報告を行う。

3）埼玉学習センターでの地域関連面接授業の事例報告

①面接授業の内容

「和光市に見る地域包括ケアの実務」センター外面接授業として実施。

日　時　2018年５月19日（土）、20日（日）の２日間
場　所　和光市の公共施設と介護事業施設現場。
参加数　21名（男性11名、女性10名）
講　師　松本和光市長、市地域包括ケア課長の阿部剛氏、前市保健福祉部長の東内京一氏の３名。他に事務局として市の職員２名。
なお埼玉学習センターからは初日の冒頭に教務係長が同席。
授　業　高齢者福祉政策「和光市モデル」として全国的に注目されている和光市のケアシステムについての講義と介護施設の観察。

本報告は地域包括ケアを考察するものではないので授業内容についての記述は行わない。

１日目　前半は、和光市図書館で松本和光市長と阿部市地域包括ケア課長から和光市の地域包括ケアに関しての講義。後半は、リーシェガーデン和光の高齢者向け住宅と通所介護施設を観察。
２日目　前半は、介護定期巡回事業者のジャパンケア和光の事務所内部を見学。施設事業者の職員と質疑応答。後半は、和光市総合福祉会館で東内氏から和光市の地域ケア会議についての講義とケアプランの作成。

②事例面接授業から見えてきたこと

この授業のメインは、先進的な高齢者介護政策を行っている和光市独自の取り組みの理解とともに、現場の介護施設を直に訪問する点にある。今回のような現場に即した授業で市職員が講師となった場合、カリキュラムの作成など市側は多大な負担を負うことになる。また介護事業者も実際に要介護者が入居の状態での視察はかなりの負担になる。そのため授業を行うには行政（＝和光市）の積極的な協力と介護事業者の理解が不可欠になる。行政や事業者に協力を依頼するためには講師の手配とともに、橋渡し役が必要になる。この授業には市長に松本氏が放送大学大学院の修了生であったことが大きく関わっている。市長という特別な事例であるが、行政との間には放送大学修了生という人的関係で橋渡し役（講師も兼ねるが）を果たしていることがわかる。

2-5. 地域関連の面接授業を進めるために

地域の個別事例を面接授業で行うには、事例の取り組みを行っている当事者に講師になってもらうことが最良である。しかし当事者が講師になれるかどうか以前に、放送大学と当事者間に人的関係をつくる必要がある。このことは個別事例のみならず一般的な地域に関する授業でもいえる。その為にはまず人的関係を作る橋渡し役が不可欠となる。その上で放送大学の面接授業に理解を持ってもらいはじめて可能になる。

また埼玉学習センターの地域関連の面接授業は「秩父学」を通じて地域と関わりを持つ黒澤氏との関係があって可能になっている。「埼玉ふるさと学」を提案しているワーキンググループが講師となり、埼玉の歴史や民俗についてテーマを絞った面接授業を行っている。この講師陣も個々の事例に関わっている[注19]。

地域関連の面接授業、特に個々の取り組みにテーマを絞った授業を行うには、学習センターが日ごろから地域の人々と公開授業などを通じて、連続的な関わりを持つことが不可欠である。しかしそれだけでは関係が広がらない。和光市の場合のように放送大学の卒業生、修了生は社会の多様な場面で活動し地域に関わっている。卒業生や修了生が持っている地域との関わりを通じ、橋渡し役になることで、多様な地域関係の面接授業が実施できるのではないか。

そのために学習センターが卒業生・修了生と恒常的な組織・関係を築き、学習センターの面接授業も含めた取り組みにも卒業生・修了生の積極的な参画が必要であると考える。

3. 放送大学の地域貢献機能―学習センター・サークルのネットワーク分析を手がかりに：群馬学習センター「生物研究会」事例研究

吉田瑞樹

3-1. 研究の目的

放送大学愛知学習センター（以下「愛知SC」）は、2014年度に「学生による地域貢献活動の実態把握とそれをベースにした人材育成」をテーマに所属学生に対して調査を行い、同報告書[注20]を作成した。愛知SCでは、本報告書知見に基づき、2015年度に地域貢献活動やボランティア活動について情報発信強化などを行った。2015年度後半に、愛知SC所長の下にワーキンググループ（以下「WG」）を立上げ、2016年度に学生主体で愛知県内各地の地域貢献活動の紹介や外部への地域活動体験参加、地域貢献活動の母体市町村や団体を紹介する活動を行った。活動記録は報告書[注21]としてまとめられた。この過程において、愛知SCは、学生・同窓生とその周辺に存在する市町村や諸団体を結ぶ「橋渡し機能」を持つことが認識された。又、「橋渡し機能」により愛知SCの学生の活動や周辺団体が結び

注19　埼玉の場合、前述のように渋谷学習センター長の多様な人的なつながりがあって可能になる面接授業といえる。
注20　放送大学愛知学習センター（2015）「2014年度学長裁量経費Ⅲ 学生による地域貢献活動の実態把握とそれをベースにした人材育成　2014年度報告書」。
注21　放送大学愛知学習センター（2017）「2016年度学長裁量経費Ⅲ ボランティア活動への参加促進と活動組織の立上げに向けて 2016年度報告書」。

付き地域貢献活動へ広がる可能性が指摘された。2016年度愛知SC報告書完成後、フォローアップとして愛知SC所属学生６名に対し、それぞれが参画する地域貢献活動やボランティア活動についてインタビューを行い[注22]、その活動経緯、動機を調査した。その後、同様のインタビューは群馬SC、埼玉SC、愛知SC、千葉SCで、16名の学生・同窓生に対して実施した[注23]。合計22名へのインタビューと参加者とのディスカッションを基に以下の仮設を立てた。

放送大学SCには、同窓会とサークルがある。同窓会活動やサークル活動は全国各地のSCにより活動状況は様々である。同窓会やサークル活動のリーダー、更にサークル活動を支援する放送大学の教員には、サークル活動の核になり、サークルや同窓会活動を活発化させる「アクター」と呼べる人物が存在するのではないか。

アクターは、教員自身や教員がもつネットワークの別の教員や専門家などをサークル活動へと橋渡しし、結び付けたりしながらサークル活動を地域貢献活動と結び付ける機能を持っていることが推測される。同窓会やサークル活動が地域貢献と結びついているSCがある一方、あまり活発ではなく、さまざまな理由で停滞するSCもある。ここに見られる温度差は何に起因するのか？そこにはアクターの存在の有無やアクターが活躍できる環境に差があるのではないかということができるのではないだろうか。

環境関係のサークル活動に見られる特徴は、その分野における専門知識を持つ教員との接触が会の運営にとり重要であり、方向性や精神性を設立する助けとなることがある。専門知識をもつ放送大学教員が「アクター」となって、教員がもつネットワークの人材と橋渡しをすることで、サークル活動が大きく発展していくのではないか。このことが顕著にみられるのが、群馬SCのサークル活動「生物研究会」である。環境関係のサークル活動は、自然や環境が活動対象である為、地域貢献活動につながる可能性が高い。さまざまな機関や団体などで学んだ知識やスキルが地域貢献に有効的に結び付くかどうかは、「アクター」達がもたらすネットワーク化や「セレンディピティ（思いもよらない偶然の発見や出会い）」も重要である。本研究では、サークル活動の発展段階における「アクター」の存在と果たす役割に注目する。具体的には以下の２つの論点を検証し、グラフや表などで可視化し研究を進める。

①放送大学SCにおけるサークル活動が、SCが持つ「橋渡し機能」をベースにしつつ、外部団体とのネットワークが形成されるためには「アクター（仮称）」の存在が有効であること。

②「アクター」がサークルと外部団体を結び付け、サークルの研究課題の展開を支援することにより、発展的に「地域貢献活動」へつながって行く助けとなる。

ある集団や団体に対し紐帯を結び、或いは紐帯を結ぶ支援を行い、有機的に人・団体・活動と人・団体・活動間をつなぐ人を本研究で「アクター」と定義する。本研究では、愛知SCの2014年度から2016年度での調査研究及び活動成果を踏まえ、群馬SCのサークル生物研究会の10年間の活動経緯とネットワークの形成の経緯を比較分析することにより、SC内のサークル活動であったものが、どのようにネットワークの発展と研究課題の展開に結び付き、アクターがどのように作用し、地域貢献活動へつながったか、分析する。

3-2. 研究の進め方

1）愛知SCの2016年度活動報告書を基に、１年間のネットワークの形成過程を可視化（ネットワーク行列化とソシオグラムの作成）を行い、群馬SC「生物研究会」のネットワーク生成過程と比較する。

2）群馬SCでの聞き取り調査と「生物研究会創立十周年記念誌（以下「生物研究会10年誌」）の活動記録から、個人、団体、地域、活動などの固有名詞をリストアップし、群馬SC「生物研究会」サークル活動が大きな領域に拡大した全体像を、ネットワークの行列を作成し、更にソシオグラム化することにより定量的なイメージとして把握する。

3）次に、ネットワーク全体像の中で中核的ノード人材を抽出し、ネットワーク構築に貢献した人材の確認を進める。

4）中核的ノード人材を抽出した後、改めて「生物研究会10年誌」の記述による定性的分析を加え、「生物研究会10年誌」の時系列による活動記録により発展段階を検証し、「アクター」を明確にする。併せて、紐帯を結ぶ上で「アクター」がどのように機能したのか明示する。

5）本研究により、放送大学SCが地域貢献活動に果たす役割の可能性を明確にする。

尚、本研究では行列分析及びソシオグラム分析は、安田雪（2011）『パーソナルネットワーク』（新曜社）、及び、安田雪（2013）『ネットワーク分析』（新曜社）を参考とした。安田（2013）の『ネットワーク分析』に従い、社会ネットワーク分析で用いられるグラフを「ソシオグラム」と呼ぶ。又、グラフの点を「ノード（node）」、線（line）や、辺（edge）、弦（arc）などを「紐帯（tie）」と呼ぶ。ソシオグラム作成時の元資料である行列表で大きなものについては、最後に掲載する。ソシオグラムで矢印先端が両端にある紐帯は対称な関係、矢印先端が片端にある紐帯は非対称な関係を示す。

注22　2017年11月30日１名、同年12月１日１名、同年12月７日１名、同年12月14日１名、同年12月15日１名、同年12月15日１名各実施。

注23　埼玉SCでのインタビュー：2018年３月16日３名、2018年３月18日２名、群馬SCでのインタビュー：2018年３月17日９名各実施、愛知SCでのインタビュー：2018年４月14日１名、幕張本部での千葉SC生インタビュー：2018年10月８日１名各実施。

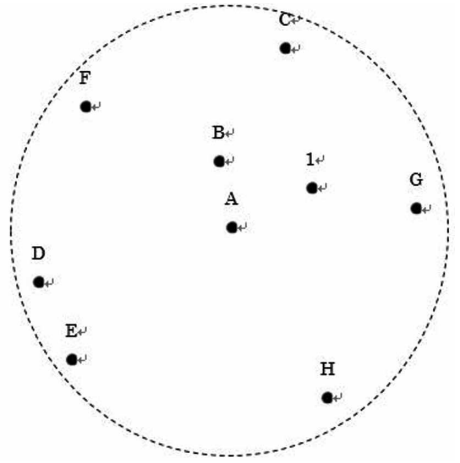

図３－１　愛知SC地域貢献活動WGネットワーク図No.1
出所：筆者作成

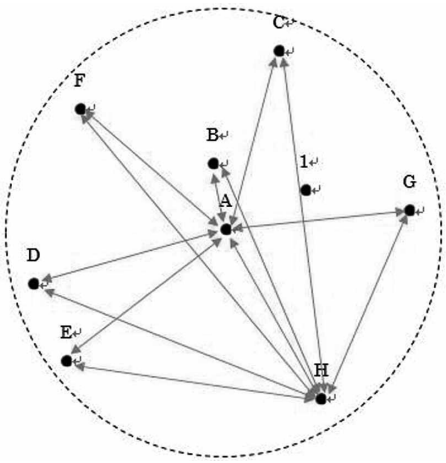

図３－２　愛知SC地域貢献活動WGネットワーク図No.2
出所：筆者作成

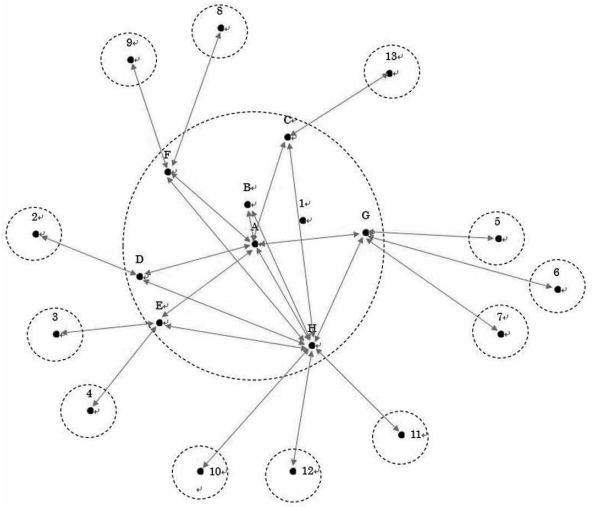

図３－３　愛知SC地域貢献活動WGネットワーク図No.3
出所：筆者作成

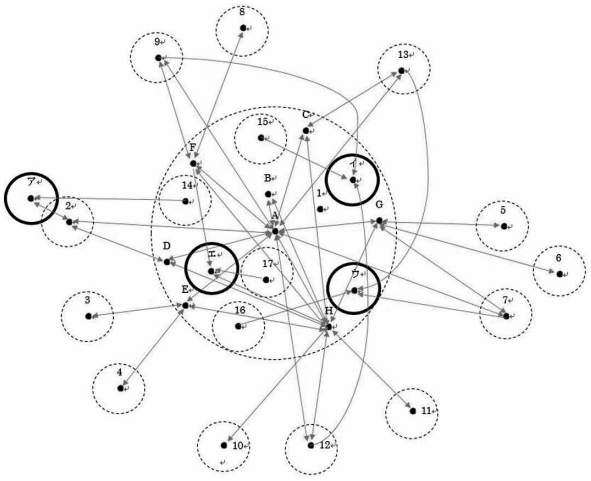

図３－４　愛知SC地域貢献活動WGネットワーク図No.4
出所：筆者作成

3-3.「愛知SC地域貢献活動」の分析

「愛知学習センターにおける2016年度活動」を以下で「愛知SC地域貢献活動」と呼び変える。

付表１の紐帯がどのように形成されたかを、注21の資料に基づき段階的にソシオグラムで示す。WG（ワーキンググループ）のメンバーは**図３－１**である。破線で描いた円が放送大学愛知SCである。A ～ HがWGメンバー８名、１は集団としてのWG（ワーキンググループ）で「団体１」である。破線円内側が愛知SC内部、円外側が愛知SC外部をそれぞれ示す。

図３－２は、WGの初回打合せでメンバー間の役割を決定後のソシオグラムである。AはWGのリーダーとしてWG全メンバーと双方向にコミュニケーションを取る。HはWGのまとめ役であり、A同様に全メンバーと双方向のコミュニケーションを取る。Aは愛知SC所長かつWG座長、Bが事務局（事務長又は係長）、C ～ Hが学生・修了生から参加したWGメンバー６名である。

図３－３では、WGが年間計画を策定段階で、各メンバーがそれぞれ参画する地域貢献活動「団体２ ～ 13」をWGに起案した状態である。例としてメンバーFは２つの「団体」を、Gは３つの「団体」を起案している。

図３－４は、WGでディスカッションを進めた結果、４件の活動計画（ア、イ、ウ、エ）が決定された段階である。このうち、「活動ア」は「団体２」の地域貢献活動に愛知SCから参加する「訪問学習会」で、愛知SC外部へ出て行う活動である。「活動イ」、「活動ウ」、「活動エ」は愛知SC内で行う活動である。「活動イ」は「団体９」と「団体12」から講師を招聘する「公開講演会」、「活動ウ」は、2015年度活動結果を報告する「活動報告会」で、「団体７」と「団体13」を外部講師として招聘し、その活動を紹介していただいたものである。なお、「活動エ」は愛知SCで例年実施

されている「学生講演会（卒業研究、修士論文の紹介）」にWGメンバー２名が発表者として参加したものである。すなわち、WGとして４回の活動を計画し、愛知SC外部で行われた活動は１回、他の３回は、愛知SC内部で行った座学或いは情報発信の位置づけの行事である。3）で説明するように、WGメンバーは年齢、性別、取り組み分野が多様であり、**図３－３**で示した地域貢献活動「団体２～13」も多様である。

「活動ア」について、「愛知SC」と「団体２」間に紐帯を２本結んだのはWGメンバーDであり、Dはこの場合の「アクター」である。同様に、WGメンバーGは、「団体７」への紐帯を結ぶ「アクター」であり、WGメンバーHは「団体12」に対する紐帯を結ぶ「アクター」である。さらに、AはD、G、Hが個人として結ぶ紐帯に、放送大学としてもう一本紐帯を加える行動をとる。Aは団体１（＝愛知SC）と同等と考えることができるだろう。この活動においてAは、放送大学愛知SCが持つ「橋渡し機能」を担っていると同時に、紐帯をより重層的にする行動も行っている。

「活動ア」、「活動イ」、「活動ウ」について元の「団体１」から見れば紐帯は２本（＝２回連続的に紐帯を結ぶの意味）結ばれているが、愛知SC外部に向かえば「地域貢献活動」になるか、少なくとも「地域貢献活動」に近づいていく。愛知SC地域貢献活動をネットワーク（紐帯）の視点から集約すると以下７点となる。

1）2016年度「愛知SC地域貢献活動」は期限を１年間に設定した活動で、４回の活動においてSC外活動は１回。
2）WGメンバー間の関係は、WG座長Aとその他のメンバー間と、まとめ役Hとその他のメンバー間においては、対称関係である。A、H以外のメンバー間の対称関係が結ばれた可能性は低い。A以外のWGメンバーはAに対し個別独立の「アクター」として地域貢献活動推進に機能したと考えられる。
3）2）の背景は、WGメンバーの関心のある分野や方向性、年齢・性別など多様[注24]で異なるためだと推測される。
4）3）の背景とWGの時間的制約の為、WGメンバーがそれぞれ紹介した団体同士に紐帯が結ばれることは無かった。
5）WGは６名のメンバーの得意分野や関心のある分野へ発展的に展開する可能性はあったが、時間的制約もありメッシュ状態にお互いが関係を持ちあい、あるいは、紐帯を結び合う段階へは進まなかったと考えられる。
6）座長Aは愛知SC所長であり、「団体１」と外部の地域貢献活動団体への「橋渡し機能」があり、紐帯を結ぶ際の支援機能により「アクター」の働きを強化した。
7）仮に「愛知SC地域貢献活動WG」が１年を超えて活動したとすれば、「活動ア」、「活動イ」、「活動ウ」の内、訪問学習会の「活動ア」のような愛知SC外部での活動に比重を置く方向性が重要と考えられる。この種の活動を継続的に行い拡大することにより、愛知SCと外部団体との紐帯が強化されていくことが期待できたと推測できる。

3-4. 群馬SC「生物研究会」10年間のネットワーク概要

「生物研究会10年誌」は群馬SCの「生物研究会」の10年間の活動記録を整理したものである。資料1）会員９名と顧問１名、相談役１名の合計11名がそれぞれの視点から書いた活動記録が掲載されている。資料2）このほかに関係５団体代表者の視点から書いた活動記録がある。資料3）最後に会長による「生物研究会10年間の活動記録」の記録文があり、活動を分野別に整理し開催行事や参加行事概要が時系列に記載されている。資料4）その後に時系列による活動詳細記録の一覧表が提供されている。本研究では群馬SCの「生物研究会」の活動が、どのような人的ネットワークを通じて地域活動や地域貢献活動に発展していったかを研究するために、まず主催者名や参加者名が行事に紐づけられて記載されている上記資料1）と資料2）の整理を進めた。資料3）と資料4）に記載されている活動記録は時系列に述べられているが、必ずしも、主催者や参加者名が紐付けられていない。従って、資料1）と資料2）を分析することで参加者、団体名、（地域）活動名などを拾い上げることとした。**付表２**、**付表３**、**表３－４**及び**図３－５～図３－９**は、主に資料1）と資料2）を基にしており、寄稿者による10年の活動のダイジェスト版あるいは、全体像ともいえるだろう。

生物研究会会長による冒頭のあいさつ文で、会の目的は「地域の自然との共生を考えることを通して、共に学びあい豊かな人間形成を目指しています。」と説明があり、①調査研究、②研修会、③交流等、④地域の歴史・農業と水環境、を４つの大項目として目的達成のための10年間の主事業としてあげている。又、活動を支える放送大学教員や群馬SCの歴代所長、博物館や環境問題専門家などの名前が記載され、こうした人達が組み込まれていることがわかる。会の方向性とそれを実現するための協働の、或いは支援の人材群といえよう。ネットワークや紐帯が形成される際に必要となるのが、人と人とのつながりである。生物研究会会員から発展的に紐づく人名54名を資料1）と資料2）からピックアップし一覧表にしたものが**付表２**である。このほかに28の活動名と35の地域名・団体名を確認した。個人名については論文への掲載の承認を全員から確認するのは困難であるため、実名を削除しアルファベットA～Z、AA～AZ、BA、BBで表現した（一部は許可を頂いて実名を記載している）。このほか卒研修論テーマなども加え、合計126件の名称を確認した。つまり、生物研究会の活動は10年間で下記の団

[注24] WGメンバー６名は、男性３名、女性３名、年代は30代、40代、60代、70代に分散し、それぞれの地域貢献活動分野も異なる。

体・地域、個人、活動、その他テーマなど126件にまで拡大したのである。

付表3のネットワーク（紐帯）を**図3－6**のソシオグラムに示す。図の左下コーナーに「生物研究会」の会員や団体を点線サークル内に配置した。左下コーナーと扇形に並べた地域名・地域活動名の間のスペースには放送大学の教員名や付随する活動名を配置した。

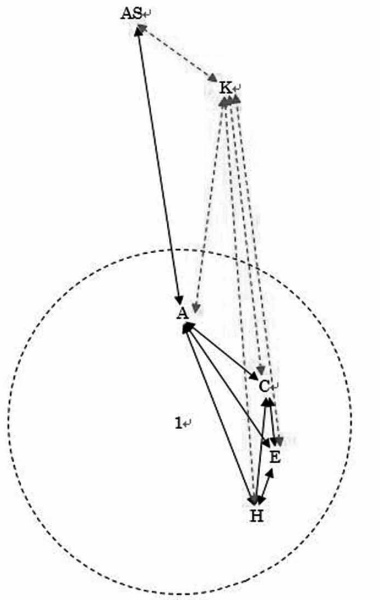

図3－5　「生物研究会」発足時関係推測図
出所：筆者作成

地域名・地域活動名に隣接する内側と外側には活動名をできる限り関連する地域名・地域活動名と紐付けて記載した。点線サークルが一部重なる場合は、地域名・地域活動名と団体名が同一活動を行っている場合を想定している。**図3－6**のスペースの定義を表現したのが**図3－7**である。尚、「生物研究会」の発足当時の記述に基づき近似のソシオグラムを描くと**図3－5**になろう。10年間で極めてシンプルな**図3－5**のネットワークが**図3－6**のネットワークまで成長したことが確認できる。尚、後述するようにKの紐帯数が他をしのぎ最大数になることを考慮し、他者の紐帯との区別を明確にするため、Kの紐帯を赤破線で示した。

「生物研究会」サークル活動発展の「アクター」は誰か？

生物研究会は、**図3－6**の左下コーナーの点線サークルで示す。例として、群馬SC生物研究会が「団体１」、生物研究会会員が「A、B、…AQ」で示されている。Aが生物研究会会長（松田：敬称略以下同じ）で、34本の紐帯が確認できる。この他、生物研究会で10本以上の紐帯が引かれているのが、会員C（石井）が13本、会員E（大島）14本、会員H（掛川）18本である。図３－６のソシオグラムで、生物研究会外側の12時方向と１時方向の中間に位置するK（河合）は放送大学専任教員かつ生物研究会の相談役である。放送大学の制度的発展過程として、Kは過去に群馬SCの配属教員であった。これは仕事として群馬SCとその学生を支援したことを意味し、群馬SCとの関係性が深い背景である。Kには39本の紐帯が確認でき、全体

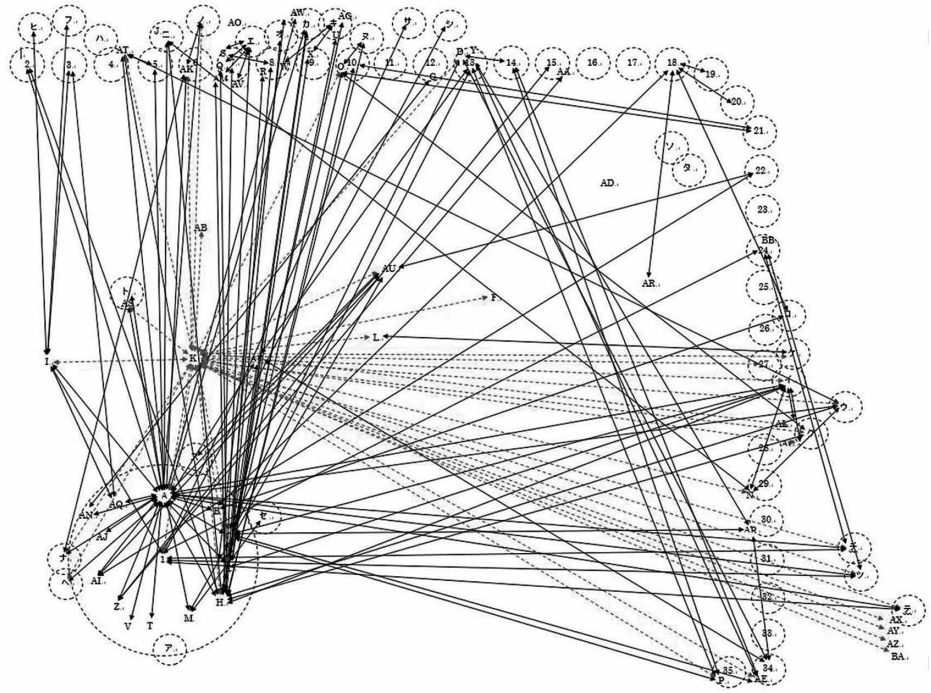

図3－6　付表３のソシオグラム
出所：筆者作成

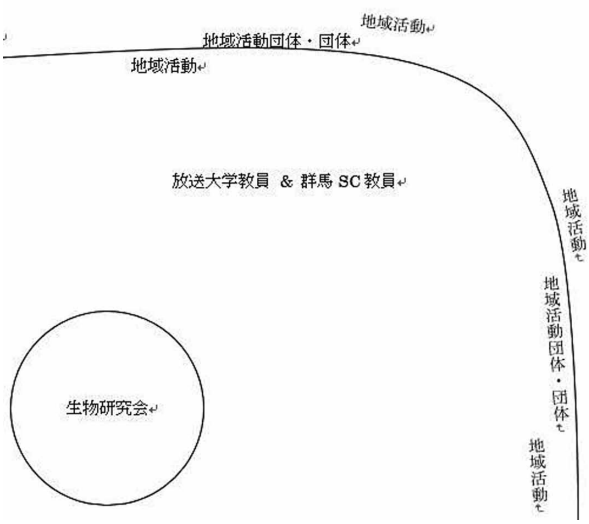

図 3－7　図 3－6 のスペース定義図
出所：筆者作成

258本の15.1％を占める。又、K、A、C、E、Hの結ぶ紐帯数の合計は（34＋13＋14＋18＋39＝）118本となり、全体の45.7％である。

次に、A、C、E、H、K間の紐帯状況を確認する。５人の紐帯を**図 3－8** のソシオグラム（**図 3－6** の部分抽出）と「生物研究会10年誌」記述から分析する。

1）A（テーマ：佐渡野生トキの保護活動）、C（テーマ：放送大学にとって、学生団体とは）、E（テーマ：魚の棲める河川改修）の卒業研究でKが指導教員。Aの卒業研究には中島（AK）（群馬県立自然史博物館副館長、NPO法人さやけき理事長：**表 3－5** でブルー表示に含まれる）が研究指導担当教員として参加。Eが師事する青井（群馬高専教授：**表 3－5** のブルー表示に含まれる）は河川、ため池、汚泥処理の専門家。
2）A（会長）、C（会計監査）、E（書記）、Hは生物研究会の中心メンバー、Kは生物研究会相談役。
3）A、C、E、H、 は、Kが主催する「活動イ」（＝「Kゼミ読書会」）のメンバーで「生物研究会」発足前から参加している。
4）A、C、E、H間は相互に紐帯を持ち、４名は何れも対等な関係である。**図 3－9** のように、A、C、E、Hを四角形に並べ替えると明確になる。
5）KはA、C、E、Hに対し扇の要の位置におり、Kを含め５名は強い紐帯を持っていることが確認出来よう。Kゼミ読書会（＝「活動イ」）も含めた５名の紐帯は**図 3－8** に示される。

C及びEに次ぐ紐帯は７本を有する人が３名、５本が４名存在する。従って、A、C、E、H、Kの５名が生物研究会紐帯の中核ノードであることが分かる。さらに、A、C、E、H、Kの５つのノードの中で、A及びKがさらに重要度の高いノードであると考えられる。Aは生物研究会会長として創業者的立ち位置におり生物研究会活動のリーダーであり推進役である。Cは会計監査、Eは書記、Kは相談役として支援しているが、Kが持つ紐帯39はAの紐帯34もしのいでいる。Kは生物研究会に対し支援以上の機能を持っている可能性がある。尚、本研究は、「生物研究会10年誌」に16名の関係者が、個人の主観や印象に基づいて記述していることを考慮し、集計と分析を行っていることを明示しておきたい。しかしながら、誰が何に参加したかについては、記述した方々が、事柄の重要度を考慮したものと判断して差し支えないものと考えている。何人もの人が記述に書き込み、紐帯が集中する人名は、ネットワークの中で重要な役割を果たしている証左である。本研究では、54名の個人間紐帯の強さや成熟度などを図る調査やアンケートなどを行っておらず

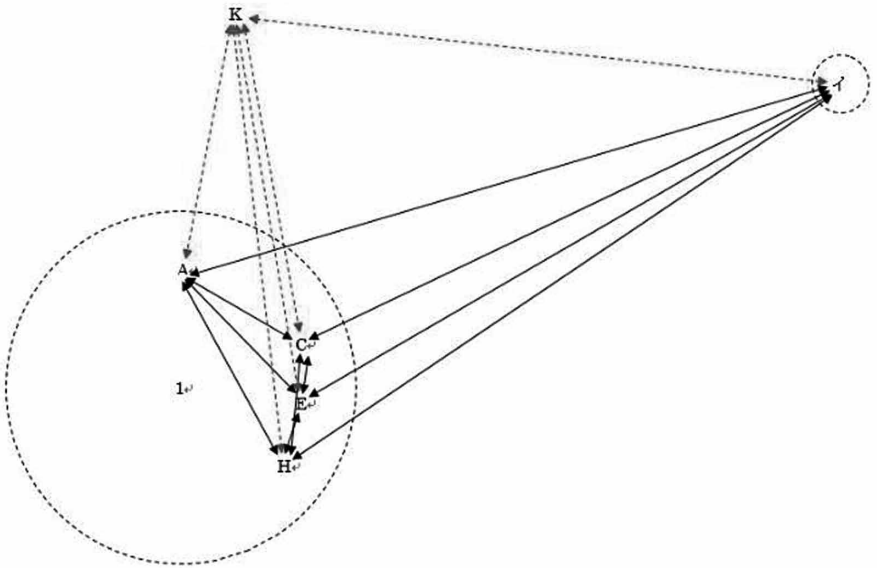

図 3－8　A・C・E・H・K関係図
出所：筆者作成

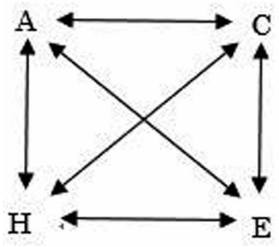

図３－９　Ａ・Ｃ・Ｅ・Ｈ関係図
出所：筆者作成

定性的な評価はできないため、ここでは取り上げない。中核ノードを探し出すことを目的の第一としている。生物研究会の９名のメンバーが「生物研究会10年誌」に寄稿していること、群馬SCでのインタビュー９名の内、生物研究会のメンバー５名にヒアリングしたことを付記する。**付表３**から54名の個人別紐帯数を抜きだした資料が**表３－４**である。

愛知SC「地域貢献活動」のソシオグラム（**図３－４**）と群馬SC「生物研究会」のソシオグラム（**図３－６**）で明確な差異がある。活動開始時点の破線で示す円（＝愛知SCでは「WG」、群馬SCでは「生物研究会」）の外側にある団体・地域や活動間同士が紐帯でつながっているか、いないかを確認すると、群馬SC「生物研究会」のソシオグラムにおいては、扇央に配置した団体・地域や活動同士が紐帯でつながるものが数多く確認できる。一方、愛知SCのソシオグラムではWGの外側にある団体・地域や活動同士がつながってはいない。もう一つの差異は、群馬SC「生物研究会」が同好の士の集まりであるのに対し、愛知SCのWGは、前記した通り、愛知SCとして活動テーマがまずあり、それに沿ってSC「所長」が呼び掛けて集めたメンバーであり、いわば「アクター」集団である。又、愛知SCの2016年度活動は、「ボランティア活動への参加促進と活動組織の立上げに向けて」のテーマ表示があるように、１年期限の試験的取り組みであり、活動後にWGは解散され終了となった。群馬SC「生物研究会」活動は、企業活動がゴーイング・コンサーンであるように、中心メンバーが継続する限り、終りのない活動であろう。このため、SC内サークル活動から地域貢献活動へ発展していくし、地域貢献活動へ発展した活動が複数あれば活動団体同士が、相互に交流し協働するということも発展段階のひとつだと考えることが出来よう。

3-5. 群馬SC「生物研究会」発足時から１年毎の参加行事状況

「生物研究会10年誌」の巻末に記載されている「発足当時からの活動記録」（＝平成16年度から平成28年度４月までの記録とそれ以後の予定の記載）から、生物研究会の発足段階から、１年毎にその活動行事を確認する。「生物研究会10年誌」巻末データは、年度別かつ時系列に参加行事や主催行事が整理されているので、このデータに４種類の大項目などを加えて作成した**付表４**を末尾に添付する。

「生物研究会10年誌」はその活動を、①調査研究、②研修会、③交流等、④地域の歴史・農業と水環境、の４つの対項目に分類しているので、この分類に従い分析を進める。全行事に連番を付け、繰り返し的行事については、Ｘ（＝記号）－Ｙ（数字）で繰り返し回数を表示する。主要な主催者が判明しているものは５種類に分類し、４色及び無色表示した（**表３－５**下部参照）。列方向で①～④の分類を示し、各年度を１行で示した。

Ｋ（ピンク）及びＨ（グリーン）は、ほぼ満遍なく各年度で主催行事を行うか紹介している。黄色の群馬SC所長や放送大学教員、その他博物館などの専門家は、初期段階においては専門家（ブルー）が、近年は群馬SC所長（黄色）の支援も着実に行われているのが確認出来る。**表３－５**は、放送大学のフォーマルな学習カリキュラムの外側に、もう一つインフォーマルな学習カリキュラムが存在しているようにも見える。

3-6. 群馬SC「生物研究会」の年度別活動場所の状況

表３－５で示した行事を年度別の開催場所で整理した資料が**図３-10**である。行事場所を群馬SC内、群馬

表３－４　群馬SC表３行列表の個人別紐帯数

記号	紐帯数	記号	紐帯数	記号	紐帯数	記号	紐帯数	記号	紐帯数	記号	紐帯数
A	34	K	39	U	2	AE	4	AO	0	AY	2
B	4	L	3	V	2	AF	4	AP	4	AZ	2
C	13	M	4	W	2	AG	1	AQ	4	BA	2
D	4	N	5	X	2	AH	0	AR	1	BB	1
E	14	O	5	Y	1	AI	4	AS	3		
F	1	P	5	Z	5	AJ	2	AT	7		
G	1	Q	3	AA	3	AK	4	AU	7		
H	18	R	2	AB	1	AL	3	AV	2		
I	7	S	3	AC	1	AM	3	AW	3		
J	1	T	2	AD	0	AN	4	AX	2		

出所：筆者作成

表３－５　群馬SC「生物研究会」行事分析表

	①調査研究				②研修会																					③交流等				④地域の歴史・農業と水環境		
H16	3 マ-1				1 イ-1	2 ナ	4 ヘ-1	5 ホ																								
H17	8 マ-2	9 ミ-1	10 マ-3	17 ヤ-1	6 ウ-1	7 ヘ-2	11 イ-2	12 イ-3	13 ム	14 メ	15 ア	16 モ-1	19 こ-1	20 2-1											18 サ-1	21 シ-1					
H18	28 ヤ-2	30 ヨ			23 ウ-2	26 モ-2	27 2-2	29 ミ-2	31 ラ	32 リ	33 イ-4	35 ル	36 モ-3												22 ュ-1	24 ュ-2	25 シ-2	34 サ-2			
H19	43 レ				37 イ-5	39 モ-4	40 ウ-3	41 モ-5	42 イ-6	44 ロ-1	45 アア-1	47 アウ	48 アア-2	49 イ-7	50 アエ	52 イ-8	53 アオ	54 アカ	55 2-3	56 アキ	57 2-4	58 アク-1		38 ュ-63	46 アイ-1	51 サ-3					
H20	72 ト				59 アケ	60 ウ-4	61 イ-9	62 モ-6	63 アコ	64 ロ-2	65 イ-10	67 アサ	68 イ-11	70 アシ	71 イ-12	73 モ-7									66 アイ-2	69 サ-4					
H21	87 アタ				74 アス	75 コ-1	77 ウ-5	79 ロ-3	78 イ-13	81 イ-14	82 ヤ	83 アセ	84 イ-15	85 アソ	88 イ-16	89 アチ	90 アツ	91 アチ							76 ス-1	80 ス-2	86 ス-3					
H22					92 アト	93 ケ	94 コ-2	95 アナ	96 ウ-6	98 アヌ	99 アネ	100 エ-1	101 イ-17	102 アノ	103 エ-2	104 アハ	105 エ-3	106 アヒ	107 アフ	108 イ-18	109 アヘ	110 アホ	111 アマ	97 アニ								
H23					112-1 ウ-7	112-2 イ-19	113 7	114 33	117 アム-1	118 アメ	119 アモ	120 アヤ	121 アユ	122 アヨ	124 イ-20										115 アミ-1	116 ス-4	123 ス-5					
H24					125 ウ-8	126 イ-21	127 アラ	128 アム-2	129 アリ	130 エ-4	131 エ-5	132 アル	133 アレ	134 アロ	135 エ-6	136-1 イ-22	136-2 カア	137 アワ	138 カア	139 カイ	140 アク-2											
H25					141 コ-3	142 ウ-9	144 カエ	145 カオ-1	146 カカ	147 カキ	150 アム3	151 カク	153 カコ											143 カウ-1	148 アイ-3	149 カウ-2	152 カケ			
H26					154 アミ-2	155 ウ-10	156 アム-4	157 カサ	158 カシ	159 アム-5	160 カセ-1	161 アム-6	163 カス	165 エ-7	167 カタ	168 アム-7	169 カチ	170 カツ							162 テ	164 カツ	166 アイ-4				
H27					171 カテ-1	172 コ-3	173 カト	174 カセ-2	175 カナ	176 エ-8	178 エ-9	179 カヌ	180 エ-10	182 アム-7	184 カノ-1	185 カハ	187 ハ	188 カオ-2	189 カオ-3						177 カニ	183 カネ-1			181 13-1	186 13-2	
H28					191 カテ-2	192 エ-11	193 コ-4	194 カノ-2	195 カセ-3	196 カヒ-2	198 エ-12	201 イ-23	203 カヒ											190 カヒ-1	199 カヒ-2	202 カネ-2		197 13-3	200 13-4	

K 主催・紹介	H 主催・紹介	群馬SC所長 放大教員 主催・紹介	その他 専門家 主催・紹介	主催者 未確認 行事

出所：筆者作成

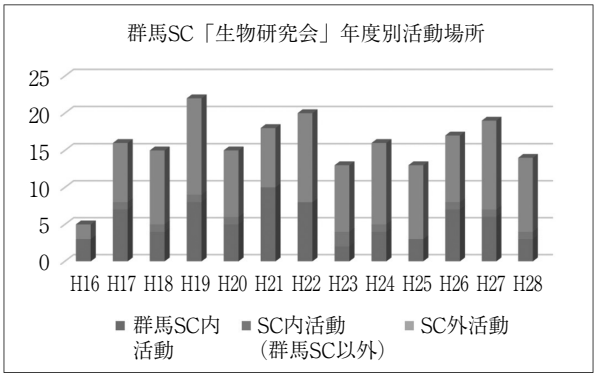

図３－10　群馬SC「生物研究会」年度別活動場所
出所：筆者作成

SC以外のSC内、SC外活動に集計した。10年間で群馬SC内活動70回（34.5%）、群馬SC以外のSC内活動10回（4.9%）、SC外活動123回（60.6%）、全体で203回行事実施し、おおよそ月に１～２回の活動頻度は設立１年目の平成17年度から安定した活動状況が確認出来る。

3-7. 群馬SC「生物研究会」の「学び」の範囲の整理

群馬SC「生物研究会」の活動を学習の種類と場所から整理した資料が**表３－６**である。所属学生が単位取得を目指して受講する授業として放送授業、面接授業（SC内）、面接授業（SC外）がある。一方、群馬SC「生物研究会」は「学び」をサークル活動として行っており、主に第５階層のSC内活動、或いは第６階層から第８階層のSC外活動である。SC外活動は、第７階層で地域活動を行うグループと協働し、或いは第８階層の営利・非営利組織団体（NPO法人含む）などが行う活動に参加する場合もある。

放送大学の「学び」を分類すれば、群馬SC「生物研究会」のサークル活動はインフォーマルかつ能動的学習である。ここで定義する受動的学習とは、放送大学が提供するカリキュラムから科目選択し学ぶフォーマルな学習を意味し、能動的学習では、課題やテーマ設定を自発的に行い、指導者も適任者を主体的に取り込み、研修会の指導者についても、無償（的）に参加してくれる放送大学教員や専門家をリクルートしなければならない。受動的学習姿勢のままでは生物研究会が目的とする学びが達成できないのである。

課題設定やテーマに沿った専門知識や実践行動力などを備え、しかも無償的にサークル活動に参加してくれる放送大学教員や専門家と関係をつなぐには、どうすればよいのか？それには、生物研究会会員が持つ人脈のみならず、豊富な人脈を備えた「アクター」の主催行事や、「アクター」からの紹介などの情報提供、「アクター」が持つ「橋渡し機能」が、サークル活動の発展に寄与することが強く推認されるのである。つまり「アクター」は、生物研究会の能動的学習を直接・間接にサポートする役割を担い、実践能力を備えているからこそ、生物研究会の活動範囲が広がって行ったと推測される。

第７階層及び第８階層の活動参加ではインフォーマルかつ能動的学習に加え、地域での実践活動に入っている。生物研究会会員は、放送大学所属学生・修士生として**表３－６**のすべての階層の「学び」に参加している。放送授業や面接授業などフォーマルかつ受動的学習に参加し、サークル活動で自主的課題設定やテーマ設定を行いインフォーマルな能動的学習まで行う。尚、**表３－６**で第７階層と第８階層は、生物研究会活

表３－６　放送大学の学びの種類と場所の一覧

階層	学習の種類と場所			有償・無償	放送大学教員関与・施設使用の有無	７つのキーワード
1	放送授業		どこでも	有償	有償教員、施設内	フォーマル、受動的、個人
2	面接授業		SC内	有償	有償教員、施設内	フォーマル、受動的、個人
3	野外面接授業		SC外	有償	有償教員、施設外	フォーマル、受動的、個人
4	面接授業（修士論文・卒業研究）		SC内外	有償	有償教員、施設内外	フォーマル、能動的、個人
5	サークル活動		SC内	無償（会費？）	教員は無償的参加、施設内	インフォーマル、能動的、グループ
6	サークル活動（SC外）	SC内活動の延長	地域社会	無償（会費？）	教員は無償的参加、施設外	インフォーマル、能動的、グループ
7		地域（貢献）活動	地域社会	無償（会費？）、経費稼ぐ必要？	教員は無償的参加、施設外	インフォーマル、能動的、グループ、実践活動
8		営利・非営利組織・団体等の活動	地域社会	経費稼ぐ必要	教員無償・有償参加、施設外	インフォーマル、能動的、グループ、実践活動

出所：筆者作成

動では混在しているともいえ、階層の分離表示に重要な意味合いは無いが、営利・非営利など（NPO）法人化されている場合は、収入や支出の所管官庁への報告が必要となる。そこで、第１階層から第６階層までが払う立場（有償）から、無償的活動の第７階層と第８階層が稼ぐことも必要な形態として階層を設けて表示した。**表３－６**は放送大学群馬SC「生物研究会」の学習が、第１階層から第８階層まで時間軸に従い垂直的統合していることを示している。又、**付表３**と**図３－６**で示した「生物研究会」のネットワークは、空間的な水平的統合の例を示していると考えられる。

第８階層に分類されるNPO法人との協働活動の代表例として、**表３－５**の行事No.17、No.28、No.98など、「NPO法人鴻巣こうのとりを育む会」の川島（記号：O）と河合（K）の紐帯が「生物研究会」の参加につながった活動が挙げられる。尚、川島の活動経緯については、河合・大橋（2017）『新訂NPOマネジメント』（放送大学教育振興会）に詳しく報告されている。

河合は川島（秀）の放送大学修士論文の指導教員である。トキに関する活動とこうのとりに関する活動は、トキやこうのとりが生息できる環境の実現など多くの課題が共通する。そのため、佐渡と埼玉での調査活動など協働化し交流が起きている。こうした交流の結果、こうのとりの生息数が100羽まで増えた兵庫県豊岡市市長の講演も埼玉県鴻巣市で行われた。群馬SC生物研究会活動において、たんぼ、川の環境、減農薬米、水生動物など、トキやこうのとりの生育に関する活動は重要な位置を占める。

第１階層から第８階層を、再度７つのキーワード（フォーマル、インフォーマル、受動的学習、能動的学習、個人学習、グループ学習、実践活動）で整理する。第１階層から第３階層は、放送大学におけるフォーマルなカリキュラムを選択する受動的学習である。第５階層と第６階層はインフォーマルな能動的学習である。第７階層と第８階層はインフォーマルな能動的学習に加え実践活動が加わる。フォーマルな受動的学習とインフォーマルな能動的学習の境界になっているのが、第４階層の面接授業（修士論文、卒業研究）のフォーマルな能動的学習である。修士論文、卒業研究では、指導教員のアドバイスを受けながら、課題設定や研究に能動的に取り組むことが要求される。第４階層を経験することは、第７階層や第８階層での実践活動に有効であることが予測される。群馬SC「生物研究会」は、川島の「NPO法人鴻巣こうのとりを育む会」の活動とリンクしている。川島はNPO法人設立を念頭に放送大学で修士論文に取り組んだのである。又、生物研究会会員であり、地域で幾つかの団体の活動を中心で支え、町議経験もある藤生幹夫（記号：AQ）も放送大学で修士論文に取り組んだ一人である。因みに、生物研究会会員の内、卒業研究、修士論文を８名が行っている。川島や藤生が修士論文で課題設定し研究成果を得、専門家である指導教員や副査の精査、口頭試問などで評価を受ける事は、自らの研究と活動の方向性に対する「報酬（後述）」を得ることにつながり、目指すNPO活動や地域活動の目的や動機を整理しなおすことにつながることが考えられる。

第７階層及び第８階層では、放送大学教員や博物館専門家など学術経験者が生物研究会のSC外活動に（無償的）参加しており、「共に学びあう」生物研究会の特色を現わしているものと言えよう。注目すべき点として、生物研究会が自ら課題やテーマ設定し、能動的学習や実践活動を行っている背景に、**表３－５**が示すように、ピンク（K）、グリーン（H）、黄色（群馬SC歴代所長）、ブルー（博物館専門家等）主催行事が基幹行事になっている事が指摘できる。放送大学内で有償提供される放送大学教員、博物館など学術専門家が持っている専門的知見や経験を、無償的共有できる「学び」である事が指摘できる。

最後に個人学習とグループ学習について指摘したい。第１階層から第４階層までは個人学習であり、第５階層から第８階層はグループ学習である。群馬SC「生物研究会」では、**表３－５**で示したように、203回

の実施行事の内、研修会に区分けされる活動が159回（約８割）を占める。主に第５階層で行われる研修会は参加者の発表の場であり、学びや研究成果を発表し、参加者である仲間から評価を得る場である。能動的学習者にとって学習や研究成果を発表し、仲間から評価を受けることは、学びや研究の真の「報酬」を得ることだと考えられる。フロリダ（2008）は、「同僚からの評価―内情に通じた他者から認められ、敬意を払われる機会」を内発的な報酬のひとつとしている。「生物研究会」が長く継続してきた背景のひとつが、「発表」の場、即ち学びや研究に対する「内発的報酬」の場を数多く確保してきたことにあるのではないかと考えられるのである。

生物研究会会長（A）にインタビューを行い、「私の地域貢献活動」という３頁のレジメを入手した。これまで分析を行った「生物研究会10年誌」を更に要約した内容だと言えよう。このレジメには1）どのような経緯で活動を行ったか、と2）（主要な）関係団体が記載されている。**図３－６**及び**表３－５**により、以下の人名、団体名が「生物研究会」の重要な紐帯ノードであることの裏付けとなる（以下括弧内：人名記号）。

1）松田（A）が平成12年面接授業参加→掛川（H）の誘いで河合ゼミ読書会（K）と研究大会（K）参加→シンポジウム「山のトイレとエコトイレ」（K）参加→環境問題に関心を持つ→平標山山開き登山参加（K、AK）→山岳トイレの現状見学で環境配慮を強く意識→平成17年群馬SC「生物研究会」設立→群馬淡水生物研究会（AK）に参加

2）河合ゼミ読書会・河合ゼミ研究大会（河合：K）
群馬淡水生物研究会（平成17年―平成24年）（中島：AK）
かんな川水辺の楽校運営推進協議会（掛川：H河合ゼミ読書会）
NPO法人さやけき（中島：同上）
赤城姫を愛する集まり　ヒメギフチョウ生息保全活動（松村：AR）
鴻巣の環境を考える会会長（川島：O　河合ゼミ読書会）
倉渕ヤマアジサイの会（廣瀬：AN）
真田用水研究会（河合：K、田中：AF）

松田は、レジメの最後の文章を「これから」として以下のように締めくくっている。「大学で学ぶだけでなく、人と自然とのかかわりの中で、地域とつながる地域貢献を今後も仲間と共に支えあい活動を継続したいと思います。」

表３－６の第６階層から第８階層への展開と道筋は、群馬SCのサークル「生物研究会」の「学び」が、放送大学での受動的学習から能動的学習に高められ、更に地域貢献実践活動へつながったグッドプラクティスの例と言えるのではなかろうか。

小括

「愛知SCの地域貢献活動」と群馬SC「生物研究会」10年間の活動からの考察

1）愛知SC地域貢献活動後の指摘事項と課題の考察、群馬の事例を踏まえて

図３－２と**図３－５**が示すように、初期段階（初年度）において少人数の学生・修了生＋教員でスタートしており、両者は類似する。又、初年度の活動は、**図３－４**と**表３－５**のH16年度が示すように活動状況（件数）も類似し、活動の中心を模索したことを示している。愛知SCの地域貢献活動は、2014年度の「学生による地域貢献活動の実態把握とそれをベースにした人材育成」の実態調査と分析を踏まえて、「ボランティア活動への参加促進と活動組織の立上げに向けて」のテーマを掲げたように、活動目的の２点が明確である。「ボランティア活動への参加促進」と「活動組織の立上げに向けて」（筆者ルビ）である。「ボランティア活動への参加促進」については、愛知SCが放送大学外部組織・諸団体に対する「橋渡し機能」が妥当であることが指摘された。

図３－11の愛知SCの位置は、群馬SCや全国のSCに置き換えられることは自明であろう。又、群馬SC「生物研究会」10年の活動分析からは、**図３－６**が示すように「アクター」がネットワーク形成の橋渡し機能を果たしたことが確認できた。つまり、「生物研究会」のネットワーク形成には、組織対組織としての群馬SCの「橋渡し機能」に加え、アクターが持つ個人対個人のネットワーク形成における「橋渡し機能」が働いたと考えられる。「橋渡し機能」が二重に働いたことで、ネットワーク形成のスピードアップと深化が促進されたものと考えられる。次に愛知SCが2016年度報告書で取り上げた**図３－12**の課題について検討する。

この図で愛知SCが課題として指摘したのは愛知SCの今後の方向性である。2016年愛知SC地域貢献活動

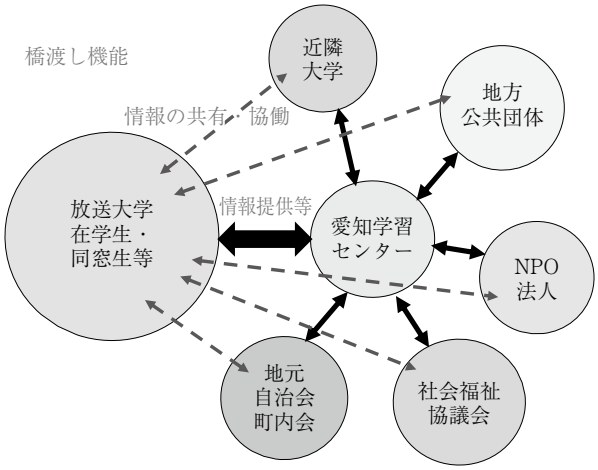

図３－11　愛知SCの橋渡し機能
出所：愛知学習センター『2016年度報告書』12頁

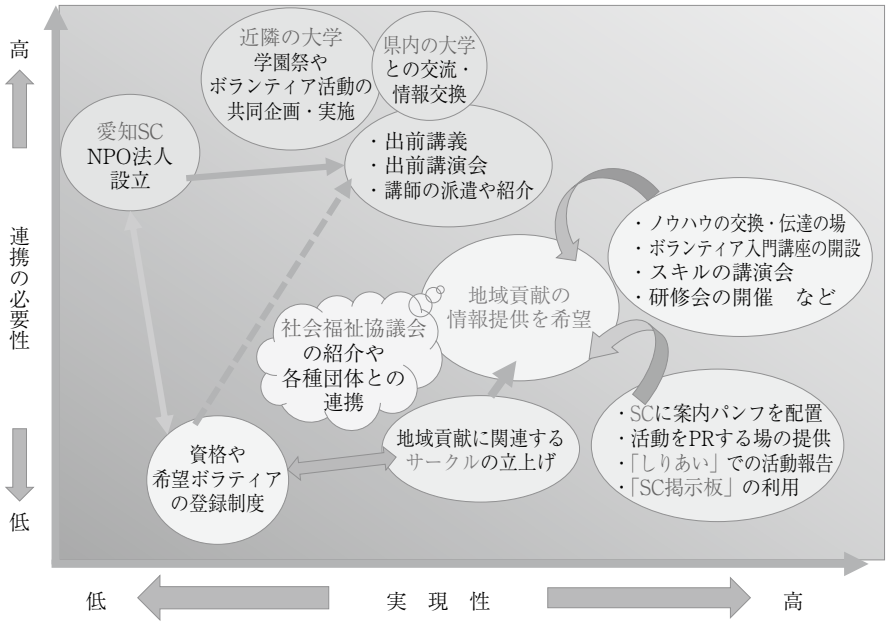

図３-12　学生の要望に見る活動組織と活動内容の位置づけ
出所：愛知学習センター『2016年度報告書』13頁

表３-７　愛知SCでのインタビュー者概要（敬称略）

No.	氏　名	性別	活動場所	活動概要
1	宮川美樹	女	尾張北部	20年前に子育て支援サークルを起ち上げ、NPO法人化。その後託児支援活動や介護老人への手芸支援等を行っている。
2	北岡浩次	男	名古屋市	15年前から複数の介護施設を経営しており、行政との交渉やボランティア希望者の受入側としての経験が多い。
3	岸辰夫	男	尾張北部	市からの委託でNPO法人（市民活動支援センター）の理事長職。その他地元で街興しなど多彩な活動を実行。
4	渡辺みゆき	女	岐阜南東部	一般社団法人 高校生しごとラボ、高校生の就職支援、企業ウェブ情報サービス、企業コンサルタント、キャリアカウンセリング
5	鵜飼司郎	男	尾張南部	メーカー定年後、生きがい作りと社会への恩返しを目的に、日本語教室の運営や災害防止などボランティア活動を実践中。
6	坪内美樹	女	尾張地区	NPOに所属（愛知支部立上げ）し、乳がん患者の支援（セルフヘルプ活動、メンタルヘルス、就職支援等）活動中。

出所：筆者作成

報告書では2016年度までは、図右下の比較的実現性の高い活動を行ってきたが、今後は、横軸が示す実現性では、低い方向（左側）へ挑戦し、更に縦軸が示す連携の必要性がより高度な方向（上）を目指すべきことを指摘している。この図は、愛知SCの2014年度報告書でも取り上げられ、その際の記載は、「報告書を作成したアンケート班とヒアリング班の意見交換を行ったうえで図化したもので、要望として出された諸活動の暫定的な位置関係を示しており、今後の議論を通して見直す余地がある」としている。左上にある４個の風船（下記）について愛知SCの地域貢献活動後のインタビュー及び群馬SC「生物研究会」事例を含め考察を進める。

風船番号を左から時計回りに、①～④とする

①愛知SC　NPO法人設立

②近隣の大学学園祭がボランティア活動の共同企画実施

③県内の大学との交流・情報交換

④出前講義、出前講演会、講師派遣や紹介

2）愛知SC地域貢献活動のインタビュー６名の概要整理

2)-1　インタビューした６名の活動場所・活動概要を**表３-７**に示す。

面接者の活動を横軸で地域貢献[注25]と社会貢献に、更に縦軸で創業型と既存団体参加型に分類しそれぞれの立ち位置を整理する。愛知SC所属６名を、創業立上

[注25] 吉田の修士論文付録pp.60-62記載のO氏へのインタビューで社会貢献と地域貢献の違いを取り上げた。地域貢献活動とは、地域に密着した貢献活動をいい、地域にこだわらないユニバーサルな貢献活動を社会貢献活動としている。

型対既存団体参加型と、地域貢献対社会貢献で**図3-13**の4象限に位置付ける。創業立上型は事業やNPOを新たに立上げて活動する人を指し、既存団体参加型はすでに存在する団体に参加する人を指す。北岡、渡辺、岸の3名はベンチャー企業家的側面も持っている。尚、放送大学で卒業研究後NPO法人を立ち上げた宮川は現在、岐阜大学大学院で修士論文研究中である。

2)-2 「(活動の)場」があるかないか

創業型の場合も、岸のように既に貸しビルなど活動の「(ハードとしての)場」を所有する場合と、北岡のように銀行借り入れによる事業化を行い福祉事業所など「場」を築いていく場合がある。宮川は岸が持つ「場＝貸しビルや手芸店」を借りながら、岸から運営ノウハウや経営面の指導や支援を受けられる立場にある。ハードとしての「場」にソフトの「場」を作って行った。地域貢献活動において、岸は宮川のメンター的支援者でもあったと言えそうだ。「(ハード＆ソフトの)場」を自ら作り出す人を創業立上型、既にある「場」へ参加する人を既存団体参加型と定義できる。鵜飼の活動が100%既存団体参加型かと言えばそうではない。地域貢献活動の他にサークル活動立上げも積極的にやっている。

2)-3　NPO法人等で活動する所属学生と愛知SCとのつながりを改善するには

放送大学での学習が大きな要素となって事業が立ち上がったのは、渡辺と宮川のケースである。北岡の場合、勉学はあくまで学ぶ楽しさの追求。鵜飼は、学ぶことの楽しさと学んだ知識を実践に生かす楽しさ。坪内は中間的である。又、学生間のつながりは、インタビューしたNPO法人等で活動する人達と愛知SC間は希薄である。もちろん、クラス会や同窓会、サークルなどのつながりはあるが、地域貢献活動や社会貢献活動を通してのつながりの面では十分に関係性は確立されていない。NPO法人等で活動する愛知SC所属学生は、SCとの関係が希薄である。今後、愛知SC所属学生でNPO法人を含む様々な団体活動を、愛知SCで積極的に紹介し、ボランティア活動や地域貢献・社会貢献活動の先端で行動している仲間が愛知SCで説明会を行うなど情報共有することが可能であろう。**表3-6**の階層7及び階層8の事例を身近に知る例になると思われる。又これは、**図3-12**の左上の風船①「愛知SC NPO法人設立」の前段階で多くの事業紹介が可能な項目と思われる。群馬SC「生物研究会」の10年の活動では、NPO法人を運営する所属学生との連携事例を見る事が出来るのである。②～④についても、群馬SC「生物研究会」活動において、類似の活動事例が見られる。

2)-4　既存団体参加型人材や創業立上げ型人材の支援

愛知SC地域貢献活動は、既存団体参加型での社会貢献或いは地域貢献の促進の位置付けになろう。愛知SCの活動において既存団体への参加促進活動紹介などは可能であるが、創業立上型人材を生み出すことは

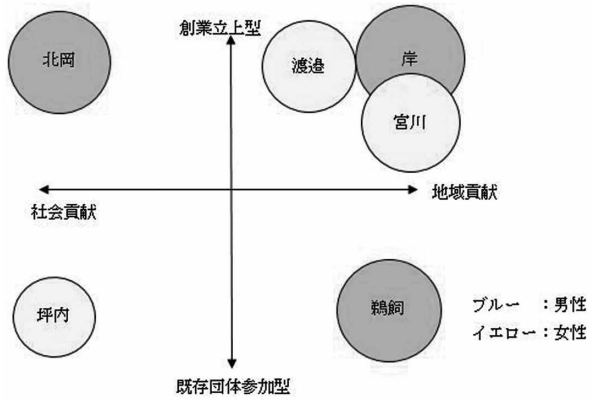

図3-13　愛知SC面談者の立ち位置
出所：筆者作成

容易ではなかろう。創業立上げ型人材は運営資金、事業計画なども含め自ら活動の場を作り、課題設定し問題解決に取り組むモチベーションが必要だと考えられるからである。この点で放送大学が提供すべき情報や講座が創業立上げ型人材を支援するプログラムの可能性を検討できるのではなかろうか。

2)-5　社会貢献型と地域貢献型

6名の方の内、北岡、坪内以外は居住地など地元で活動している。北岡、坪内は社会貢献型である。他の岸、宮川、渡辺は地元での地域貢献活動に参加し、鵜飼は活動の中心は地元であるが、地域を離れた場所での活動もしている。従って、風船①を検討する場合、地域にこだわらない社会貢献型なのか、愛知SCがある名古屋市居住者が参加しやすい地域貢献型を目指すのかも課題であろう（**図3-13**参照）。

3) インフォーマルな能動的学習の促進の仕組みが重要

・生物研究会の松田、石井、大島、掛川など複数名と、河合や中島、青井との出会いは「セレンディピティ（思いもよらない偶然の発見や出会い）」となり、大きなネットワークを生み出すきっかけとなった。**表3-5**から、河合、中島、青井が主催した行事は、全体203回の76回、掛川の主催行事は17回あり、生物研究会活動の幹となったのである。

・河合が群馬SCや「生物研究会」と深く長い紐帯が持てた背景には、以前の制度で群馬SC配属だったこと（仕事で支援した）が重要である。今後はこのような「きっかけ」は制度的に期待できないのではないか。

・河合と川島（秀）の紐帯も生物研究会の中心的な課題に結び付いている。

・生物研究会の主要メンバー（松田、石井、掛川）や、こうのとりの川島、その他生物研究会メンバーの高寺、藤生など多くの関係者がフォーマルな能動的学習である卒業研究、修士論文の経験者である。指導教員のアドバイスのもと、自発的に課題を決め、研究範囲や研究手法など意思決定を能動的に進めなければならない。「学ぶ」を越えて能動的・自発的な学び＝「研究」が持つ意味は大きいと思われ

る。
・生物研究会の発展には「無償かそれに近い形の」放送大学教員陣や外部専門家の活動参加が寄与したことが指摘できる。
・アクターの交替もいずれ起こる事も考えれば、新たな専門家を今後も取り込むことが必要になって来よう。
・群馬SC「生物研究会」の発展の背景や地域貢献につながった道筋を知ることは、放送大学や全国SCにとってもグッドプラックティスとして参考になるものと思われる。
・放送大学及び全国SCはフォーマル学習の推進拠点である。一方、群馬SC「生物研究会」のサークル活動は、インフォーマルな能動的学習が発展することで地域貢献活動につながって行くことを示している。能動的学習は、放送大学のフォーマル学習の卒業研究や修士論文でも取り組むことが可能である。従って、放送大学がフォーマルな受動的学習、能動的学習支援のみならず、インフォーマルな能動的学習の支援体制を構築し、人材育成の機会を増やすことができれば、より多くの所属学生が地域貢献活動に取り組む事が期待できるのではなかろうか。
・それには、全国SCでのサークル活動などのインフォーマルな能動的学習のグッドプラックティスを集め発展の背景を探ることも必要ではなかろうか。

サークル活動等のインフォーマルで能動的な活動グッドプラックティスの事例の分析とともに同窓会活動の考察が必要である。学位授与式や学習センターで開催される入学式や卒業式、卒業・修了祝賀会等では学習センターと連携して会を盛り上げる同窓会の役割は大きい。また同窓会が、諸サークル間の連携を図り、センターの特定プログラムへの参加・協力のイニシアティブを取る場合もある。

同窓会活動は、センター間で異なり違いが多い。センター毎に、サークル活動と同窓会活動との連携・調整は、インフォーマルで能動的活動が、フォーマルで受動的な学習の成果を生かすという観点からは重要である。別稿で論じたい。

引用文献

河合明宣、大橋正明『新訂　NPOマネジメント』放送大学教育振興会、2017年

立田慶裕『生涯学習の新たな動向と課題』放送大学教育振興会、2018年

野澤一博「大学の地域連携の活動領域と課題」『産学連携』(13) 1 、2016年

藤生幹雄「地域活性化（まちおこし）：実体験を通して見た地域の現状と今後への展望)、2010年度放送大学修士論文

フロリダ，F（井口典夫訳）『クリエイティブ資本論』ダイアモンド社、2008年

放送大学愛知学習センター『学生による地域講演活動の実態把握とそれをベースにした人材育成』放送大学愛知学習センター、2015年

放送大学愛知学習センター『ボランティア活動への参加促進と活動組織立上げに向けて』放送大学愛知学習センター、2017年

放送大学石川学習センター『地域創生へのヒント―野々市市の場合―』放送大学石川学習センター、2018年

放送大学中国・四国ブロック学習センター編著『放送大学に学んで―未来を拓く学びの軌跡』中央製版印刷（株)、2017年

放送大学学習センター支援室・総合戦略企画室編『地域貢献研究会における議論と学習センターのプロジェクト報告　2013年度』、2014年

宮本みち子（2014)「放送大学に対する地域ニーズの探索と地域貢献の可能性を探る」平成26年度学長裁量経費報告書、HP「地域貢献への取り組み」(https://www.ouj.ac.jp/pj/、2018/10/01)

森岡清志『パーソナルネットワーク論』放送大学教育振興会、2012年

安田雪『パーソナルネットワーク』新曜社、2011年

安田雪『ネットワーク分析』新曜社、2013年

吉田瑞樹『グローバル経験シニア世代の地域貢献の可能性の考察―生涯学習はその入り口となりうるか～半田市の事例を踏まえて―』オリンピア印刷（株)、2014年（2014年度放送大学修士論文）

面接授業科目一覧・時間割表

平成29年度（2017年度）第１学期『面接授業開設科目一覧』放送大学

平成29年度（2017年度）第１学期『面接授業時間割表　南関東センター版』放送大学

平成29年度（2017年度）第１学期『面接授業時間割表　北海道・東北ブロック版　北海道・青森・岩手・宮城・秋田・山形・福島』放送大学

平成29年度（2017年度）第１学期『面接授業時間割表　北関東ブロック版　茨城・栃木・群馬・新潟・山梨・長野』放送大学

平成29年度（2017年度）第１学期『面接授業時間割表　北陸・東海ブロック版』放送大学

平成29年度（2017年度）第１学期『面接授業時間割表　近畿ブロック版』放送大学

平成29年度（2017年度）第１学期『面接授業時間割表　中国・四国ブロック版』放送大学

平成29年度（2017年度）第１学期『面接授業時間割表　九州・沖縄ブロック版』放送大学

2017年度　第２学期『面接授業開設科目一覧』放送大学

2017年度　第２学期『面接授業時間割表　南関東センター版』放送大学

平成29年度（2017年度）第２学期『面接授業時間割表　北海道・東北ブロック版　北海道・青森・岩手・宮城・秋田・山形・福島』放送大学

2017年度　第２学期『面接授業時間割表　北関東ブロック版　茨城・栃木・群馬・新潟・山梨・長野』放送大学

2017年度　第２学期『面接授業時間割表　北陸・東海ブロック版』放送大学

2017年度　第２学期『面接授業時間割表　近畿ブロック版』放送大学

2017年度　第２学期『面接授業時間割表　中国・四国ブロック版』放送大学

2017年度　第２学期『面接授業時間割表　九州・沖縄ブロ

ック版』放送大学
2018年度　第１学期『面接授業開設科目一覧』放送大学
2018年度　第１学期『面接授業時間割表　南関東センター版』放送大学
平成30年度（2018年度）第１学期『面接授業時間割表　北海道・東北ブロック版　北海道・青森・岩手・宮城・秋田・山形・福島』放送大学
2018年度　第１学期『面接授業時間割表　北関東ブロック版　茨城・栃木・群馬・新潟・山梨・長野』放送大学
2018年度　第１学期『面接授業時間割表　北陸・東海ブロック版』放送大学
2018年度　第１学期『面接授業時間割表　近畿ブロック版』放送大学
2018年度　第１学期『面接授業時間割表　中国・四国ブロック版』放送大学
2018年度　第１学期『面接授業時間割表　九州・沖縄ブロック版』放送大学

謝辞

貴重な時間をインタビューに快く応じていただいた群馬SC、埼玉SC、愛知SCの同窓会会長（下田会長、武内会長、脇阪会長）や所属学生の方々に御礼申し上げる。インタビューの成果全てを分析しきれていないことをお許し願えればと思う。この成果は次回以降の研究機会に是非生かして行きたいと考えている。

群馬SC、埼玉SC、愛知SCでの場所を提供頂いた各所長、NPO関係者など研究中にお世話になった方々、2016年愛知SC地域貢献活動でWG座長として大きな方向付けや満遍なく細部の調整を頂いた、服部重昭元所長に感謝いたします。

（2018年11月２日受理）

付表１　「愛知SC地域貢献活動」ネットワークの行列

			連番	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	
			記号連番	1	2	3	4	5	6	7	8	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	1	2	3	4	
			個人団体	個人	個人	個人	個人	個人	個人	個人	個人	団体	団体	団体	団体	団体	団体	団体	団体	団体	団体	団体	団体	団体	団体	団体	団体	団体	活動	活動	活動	活動	
連番	記号連番	個人団体	記号	A	B	C	D	E	F	G	H	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	ア	イ	ウ	エ	
1	1	個人	A	1	1	1	1	1	1	1	1		1					1		1			1	1									13
2	2	個人	B	1	1						1																						3
3	3	個人	C	1		1					1													1									4
4	4	個人	D	1			1				1		1																				4
5	5	個人	E	1				1			1			1	1																		5
6	6	個人	F	1					1		1								1	1													5
7	7	個人	G	1						1	1					1	1	1															6
8	8	個人	H	1	1	1	1	1	1	1	1										1	1	1										11
9	1	団体	1									1																					1
10	2	団体	2	1			1						1																1				4
11	3	団体	3					1						1																			2
12	4	団体	4					1							1																		2
13	5	団体	5							1						1																	2
14	6	団体	6							1							1																2
15	7	団体	7	1						1								1															3
16	8	団体	8						1										1														2
17	9	団体	9	1					1											1													3
18	10	団体	10								1										1												2
19	11	団体	11								1											1											2
20	12	団体	12	1							1												1										3
21	13	団体	13	1		1																		1									3
22	14	団体	14																						1								1
23	15	団体	15																							1							1
24	16	団体	16																								1						1
25	17	団体	17																									1					1
26	1	活動	ア										1												1				1				3
27	2	活動	イ																	1			1			1				1			4
28	3	活動	ウ															1						1			1				1		4
29	4	活動	エ						1		1																	1				1	4
				13	3	4	4	5	6	6	12	1	4	2	2	2	2	4	2	4	2	2	4	4	2	2	2	2	2	1	1	1	101

注：関係がある部分は１、関係がない部分には０、対角線上の本人から本人は１で示す。以後に示す行列も同様。
出所：筆者作成

付表 2　群馬SC「生物研究会」ネットワーク分析表（個人名のみ）

	連番	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54		
連番	記号	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	P	Q	R	S	T	U	V	W	X	Y	Z	AA	AB	AC	AD	AE	AF	AG	AH	AI	AJ	AK	AL	AM	AN	AO	AP	AQ	AR	AS	AT	AU	AV	AW	AX	AY	AZ	BA	BB	総数	記号
1	A	1	1	1		1			1	1		1		1							1		1				1						1			1	1	1			1			1		1	1	1		1						21	A
2	B	1	1																																																					2	B
3	C	1		1	1	1			1			1					1															1	1										1													10	C
4	D			1	1																																																			2	D
5	E	1		1		1			1			1						1	1			1			1									1						1										1						12	E
6	F						1					1																																												2	F
7	G							1																																																1	G
8	H	1		1		1			1			1				1																															1									7	H
9	I	1								1		1																																1												4	I
10	J										1																																													1	J
11	K	1		1		1	1		1	1		1	1		1	1	1											1	1	1							1	1								1	1	1			1	1	1	1		23	K
12	L											1	1																																		1									3	L
13	M	1												1																																		1								3	M
14	N											1			1																																									2	N
15	O								1			1				1																																								3	O
16	P			1								1					1																																							3	P
17	Q					1												1																																						2	Q
18	R					1													1																																					2	R
19	S																			1																																				1	S
20	T	1																			1																																			2	T
21	U					1																1																																		2	U
22	V	1																					1																																	2	V
23	W																							1																																1	W
24	X					1																			1																															2	X
25	Y																									1																														1	Y
26	Z	1																									1	1																												3	Z
27	AA											1															1	1																												3	AA
28	AB											1																	1																											2	AB
29	AC											1																		1																										2	AC
30	AD																														1																									1	AD
31	AE			1																												1																								2	AE
32	AF	1		1																													1																							3	AF
33	AG					1																												1																						2	AG
34	AH																																		1																					1	AH
35	AI	1																																		1												1								3	AI
36	AJ	1																																			1																			2	AJ
37	AK	1										1																										1																		3	AK
38	AL											1																											1																	2	AL
39	AM					1																																		1																2	AM
40	AN	1																																							1															2	AN
41	AO																																									1														1	AO
42	AP			1																																							1													2	AP
43	AQ	1								1																																		1												3	AQ
44	AR																																												1											1	AR
45	AS	1										1																																		1									3	AS
46	AT	1							1			1																																				1							4	AT
47	AU	1										1	1	1																						1														1						6	AU
48	AV																																																	1						1	AV
49	AW	1				1																																													1					3	AW
50	AX											1																																								1				2	AX
51	AY											1																																									1			2	AY
52	AZ											1																																										1		2	AZ
53	BA											1																																											1	2	BA
54	BB																																																							1	1	BB
総数(補正無)		21	2	10	2	12	2	1	7	4	1	23	3	3	2	3	3	2	2	1	2	2	2	1	2	1	3	3	2	2	1	2	3	2	1	3	2	3	2	2	2	1	2	3	1	3	4	6	1	3	2	2	2	2	1	180	
自己分補正		20	1	9	1	11	1	0	6	3	0	22	2	2	1	2	2	1	1	0	1	1	1	0	1	0	2	2	1	1	0	1	2	1	0	2	1	2	1	1	1	0	1	2	0	2	3	5	0	2	1	1	1	1	0	126	
紐帯換算		10	0.5	4.5	0.5	5.5	0.5	0	3	1.5	0	11	1	1	0.5	1	1	0.5	0.5	0	0.5	0.5	0.5	0	0.5	0	1	1	0.5	0.5	0	0.5	1	0.5	0	1	0.5	1	0.5	0.5	0.5	0	0.5	1	0	1	1.5	2.5	0	1	0.5	0.5	0.5	0.5	0	63	
連番		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54		
記号		A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	P	Q	R	S	T	U	V	W	X	Y	Z	AA	AB	AC	AD	AE	AF	AG	AH	AI	AJ	AK	AL	AM	AN	AO	AP	AQ	AR	AS	AT	AU	AV	AW	AX	AY	AZ	BA	BB		

注：アルファベット（A ～ Z、AA ～ AZ、BA、BB）：54名の個人

出所：筆者作成

付表 3　群馬SC「生物研究会」ネットワーク分析表（全体表）

			個人番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54		
全体連番	連番		記号	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	P	Q	R	S	T	U	V	W	X	Y	Z	AA	AB	AC	AD	AE	AF	AG	AH	AI	AJ	AK	AL	AM	AN	AO	AP	AQ	AR	AS	AT	AU	AV	AW	AX	AY	AZ	BA	BB		
1	1	個人	A	1	1	1		1			1	1		1		1							1		1				1						1				1	1	1			1			1		1	1	1		1						21	A
2	2	個人	B	1	1																																																						2	B
3	3	個人	C	1		1	1	1			1			1					1															1	1										1													10	C
4	4	個人	D			1	1																																																			2	D
5	5	個人	E	1		1		1			1			1						1	1			1			1									1							1										1						12	E
6	6	個人	F						1					1																																													2	F
7	7	個人	G							1																																																1	G
8	8	個人	H	1		1		1			1			1				1																															1									7	H
9	9	個人	I	1								1		1																																1													4	I
10	10	個人	J										1																																													1	J
11	11	個人	K	1		1		1	1		1	1		1	1		1	1	1										1	1	1								1	1								1	1	1			1	1	1	1		23	K
12	12	個人	L											1	1																																			1								3	L
13	13	個人	M	1												1																																		1								3	M
14	14	個人	N											1			1																																										2	N
15	15	個人	O								1			1				1																																										3	O
16	16	個人	P			1								1					1																																									3	P
17	17	個人	Q					1												1																																								2	Q
18	18	個人	R					1													1																																							2	R
19	19	個人	S																			1																																					1	S
20	20	個人	T	1																			1																																					2	T
21	21	個人	U					1																1																																				2	U
22	22	個人	V	1																					1																																			2	V
23	23	個人	W																							1																																	1	W
24	24	個人	X					1																			1																																	2	X
25	25	個人	Y																									1																																1	Y
26	26	個人	Z	1																									1	1																														3	Z
27	27	個人	AA											1															1	1																														3	AA
28	28	個人	AB											1																	1																													2	AB
29	29	個人	AC											1																		1																												2	AC
30	30	個人	AD																														1																											1	AD
31	31	個人	AE			1																												1																										2	AE
32	32	個人	AF	1		1																													1																									3	AF
33	33	個人	AG					1																												1																								2	AG
34	34	個人	AH																																		1																							1	AH
35	35	個人	AI	1																																		1												1									3	AI
36	36	個人	AJ	1																																			1																					2	AJ
37	37	個人	AK	1										1																										1																				3	AK
38	38	個人	AL											1																											1																			2	AL
39	39	個人	AM					1																																		1																		2	AM
40	40	個人	AN	1																																							1																	2	AN
41	41	個人	AO																																									1															1	AO
42	42	個人	AP			1																																							1														2	AP
43	43	個人	AQ	1								1																																		1												3	AQ
44	44	個人	AR																																												1											1	AR
45	45	個人	AS	1										1																																			1								3	AS
46	46	個人	AT	1							1			1																																				1								4	AT
47	47	個人	AU	1										1	1	1																						1													1								6	AU
48	48	個人	AV																																																	1							1	AV
49	49	個人	AW	1				1																																													1						3	AW
50	50	個人	AX											1																																								1					2	AX
51	51	個人	AY											1																																									1				2	AY
52	52	個人	AZ											1																																										1			2	AZ
53	53	個人	BA											1																																											1		2	BA
54	54	個人	BB																																																								1	BB
55	1	団体	1	1	1	1		1			1	1		1		1							1		1				1									1	1				1			1													15	1
56	2	団体	2	1							1																																															2	2
57	3	団体	3									1																																		1												2	3
58	4	団体	4																																														1								1	4
59	5	団体	5	1																																													1								2	5
60	6	団体	6																																																							0	6
61	7	団体	7								1											1																																					2	7
62	8	団体	8								1									1	1	1																				1									1							6	8
63	9	団体	9																							1																																1	9
64	10	団体	10								1							1																																									2	10
65	11	団体	11																																								1																1	11
66	12	団体	12							1																																	1																2	12
67	13	団体	13			1	1							1					1									1						1	1										1														8	13
68	14	団体	14				1												1															1																										3	14
69	15	団体	15																										1	1																														2	15
70	16	団体	16																										1																															1	16
71	17	団体	17																																																								0	17
72	18	団体	18		1																																										1												2	18
73	19	団体	19																																																								0	19
74	20	団体	20																																																								0	20
75	21	団体	21															1																																									1	21
76	22	団体	22																																			1												1								2	22
77	23	団体	23																																																								0	23
78	24	団体	24																																																							1	1	24
79	25	団体	25																																																								0	25
80	26	団体	26																																																								0	26
81	27	団体	27											1																																													1	27
82	28	団体	28																																																								0	28
83	29	団体	29											1			1																																											2	29
84	30	団体	30																																										1														1	30
85	31	団体	31																																																								0	31
86	32	地域	32																																																								0	32
87	33	地域	33																																																								0	33
88	34	地域	34				1							1																				1	1										1														5	34
89	35	地域	35																1																																								1	35
90	1	卒業研究	a																																																								0	a
91	2	卒業研究	b											1																																													1	b
92	3	卒業研究	c																																																								0	c
93	4	修士論文	d																																																								0	d
94	5	修士論文	e																																																								0	e
95	6	修士論文	f																																																								0	f
96	7	卒業研究	g											1																																													1	g
97	8	テーマ	h																																																								0	h
98	9	卒業研究以外の一般	i																																																								0	i
99	1	活動	ア																																																								0	ア
100	2	活動	イ	1		1		1			1			1			1															1									1																		8	イ
101	3	活動	ウ	1							1			1																																			1								4	ウ
102	4	活動	エ								1									1		1																				1									1							5	エ
103	5	活動	オ								1																																															1	オ
104	6	活動	カ	1		1		1																																															1				4	カ
105	7	活動	キ																					1		1	1																																3	キ
106	8	活動	ク								1			1			1															1									1																		5	ク
107	9	活動	ケ											1	1																																												2	ケ
108	10	活動	コ		1																																																						1	コ
109	11	活動	サ																																																								0	サ
110	12	活動	シ																																																								0	シ
111	13	活動	ス																																																1								1	ス
112	14	活動	セ													1																																											1	セ
113	15	活動・学術研	ソ																																																								0	ソ
114	16	活動・学術研	タ																																																								0	タ
115	17	活動・交流会	チ	1										1																																													2	チ
116	18	活動・交流会	ツ	1										1																																								1	1	1	1	6	ツ
117	19	活動・交流会	テ	1										1																																													2	テ
118	20	活動・実験	ト	1																																														1								2	ト
119	21	活動・レクレー	ナ	1										1																										1																		3	ナ
120	22	活動・講演	ニ	1							1		1				1																																									4	ニ
121	23	活動・講演	ヌ								1							1																																									2	ヌ
122	24	活動・宿泊	ノ	1										1																										1																			3	ノ
123	25	活動・総合発	ハ																																															1								1	ハ
124	26	活動・浮び	ヒ									1																																														1	ヒ
125	27	活動・浮び	フ									1																																															1	フ
126	28	活動・浮び	ヘ	1										1																																													2	ヘ
				21	2	10	2	12	2	1	7	4	1	23	3	3	2	3	3	2	2	1	2	2	2	1	2	1	3	3	2	2	1	2	3	2	1	3	2	3	2	2	2	1	2	3	1	3	4	6	1	3	2	2	2	2	1	188	
				20	1	9	1	11	1	0	6	3	0	22	2	2	1	2	2	1	1	0	1	1	1	0	1	0	2	2	1	1	0	1	2	1	0	2	1	2	1	1	1	0	1	2	0	2	3	5	0	2	1	1	1	1	0	126	
				14	3	4	3	3	0	1	12	4	1	17	1	2	4	3	3	2	1	3	1	1	1	2	1	1	3	1	0	2	0	3	2	0	0	2	1	2	2	2	3	0	3	2	1	1	4	2	2	1	1	1	1	1	133	
				34	**4**	**13**	4	**14**	1	1	**18**	7	1	**39**	3	4	5	5	5	3	2	3	2	2	2	2	2	1	5	3	1	3	0	4	4	1	0	4	2	4	3	3	4	0	4	4	1	3	7	7	2	3	2	2	2	2	1	298	
				1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54		
				A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	P	Q	R	S	T	U	V	W	X	Y	Z	AA	AB	AC	AD	AE	AF	AG	AH	AI	AJ	AK	AL	AM	AN	AO	AP	AQ	AR	AS	AT	AU	AV	AW	AX	AY	AZ	BA	BB		

出所：筆者作成

・アラビア数字（１～35）：35の団体及び地域，アルファベット（A～Z、AA～AZ、BA、BB）：54名の個人，カタカナ（ア～ヘ）：28の活動，アルファベット（a～i）：９件の卒研・修論テーマ、その他テーマ

付表 4　群馬SC「生物研究会」10年間の活動行事記録

年度	連番	年度連番	大項目分類	大項目	場所	主催	記号	行事詳細
H16年度	1	1	②	研修会	新治村	河合	イ-1	河合ゼミ読書会
	2	2	②	研修会	群馬SC	河合	ナ	排水の未来を考える
	3	3	①	環境調査	新治村	河合	マ-1	田んぼの生物調査
	4	4	②	研修会	群馬SC	河合	ヘ-1	平標山山の家の山岳トイレについての請願運動
	5	5	②	研修会	群馬SC	—	ホ	生物研究会設立準備
H17年度	6	1	②	研修会	新治村	河合	ウ-1	第１回河合ゼミ研究大会
	7	2	②	研修会	新治村	河合	ヘ-2	平標山岳トイレ見学登山
	8	3	①	環境調査	新治村	河合	マ-2	田んぼの生物調査
	9	4	①	研修会	赤城小沼	中島	ミ-1	モリアオガエル観察会
	10	5	①	環境調査	新治村	河合	マ-3	田んぼの生物調査
	11	6	②	研修会	埼玉SC	河合	イ-2	河合ゼミ読書会
	12	7	②	研修会	群馬SC	河合	イ-3	河合ゼミ読書会
	13	8	②	研修会	群馬SC	掛川	ム	瀬と淵の生物調査報告
	14	9	②	研修会	群馬SC		メ	アルミ圧延の技術指導について
	15	10	②	設立総会	群馬SC		ア	群馬学習センター生物研究会総会
	16	11	②	公開講座	群馬SC		モ-1	公開講座
	17	12	①	環境調査	佐渡市	河合	ヤ-1	佐渡トキ関連
	18	13	③	親睦会	藤岡市平井公民館		サ-1	味噌づくり教室開催
	19	14	②	研修会	群馬SC	河合	ニ-1	トキ年表作り
	20	15	②	研修会	群馬SC	中島	2-1	群馬淡水生物研究会との共催シンポ「環境教育」
	21	16	③	地域支援活動	NPO法人さやけき　高崎市	中島	シ-1	重度身体障害児との交流
H18年度	22	1	③	地域支援活動	高崎音楽センター	中島	ユ-1	バザー
	23	2	②	研修会	新治村	河合	ウ-2	第２回河合ゼミ研究大会
	24	3	③	地域支援活動	藤岡市平井公民館	中島	ユ-2	バザー報告会
	25	4	③	地域支援活動	群馬福祉会館	中島	シ-2	重度身体障害児との交流
	26	5	②	公開講座	群馬女性会館		モ-2	公開講座　「緊迫する中東情勢」
	27	6	②	研修会	群馬SC	中島	2-2	群馬淡水生物研究会
	28	7	①	環境調査	佐渡市	河合	ヤ-2	佐渡トキ関連
	29	8	②	研修会	赤城大峰沼、小沼	中島	ミ-2	モリアオガエル観察会
	30	9	①	研修会	群馬SC		ヨ	化学実験 血液細胞の観察
	31	10	②	研修会	群馬SC		ラ	人工イクラを作ろう
	32	11	②	研修会	東京都有楽町		リ	東京国際フォーラム　トキ野生復帰シンポ
	33	12	②	研修会	群馬SC	河合	イ-4	河合ゼミ読書会
	34	13	③	親睦会	藤岡市平井公民館		サ-2	味噌づくり教室開催
	35	14	①	研修会	前橋公園		ル	サケ放流式（前橋）
	36	15	②	公開講座	沼田ミニサテライト		モ-3	公開講座
H19年度	37	1	②	研修会	群馬SC	河合	イ-5	河合ゼミ読書会
	38	2	③	地域支援活動	高崎音楽センター	中島	ユ-3	バザー
	39	3	②	公開講座	沼田ミニサテライト		モ-4	公開講座
	40	4	②	研修会	新治村	河合	ウ-3	第３回河合ゼミ研究大会
	41	5	②	公開講座	群馬SC		モ-5	公開講座　災害
	42	6	②	研修会	群馬SC	河合	イ-6	河合ゼミ読書会
	43	7	①	研修会	群馬高専	青井	レ	水辺の水質調査
	44	8	①	研修会	藤岡市平井公民館	掛川	ロ-1	鮎川調査観察　水質、生物
	45	9	②	研修会	群馬SC		アア-1	会議　幹事会　活動計画
	46	10	②	研修会	長野県、上田方面		アイ-1	学生研修旅行
	47	11	②	研修会	群馬県立自然史博物館	中島	アウ	アホウドリ保護
	48	12	②	研修会	群馬SC		アア-2	会議　幹事会　活動計画
	49	13	②	研修会	群馬SC	河合	イ-7	河合ゼミ読書会
	50	14	②	研修会	群馬高専	青井	アエ	講演　洗剤用酵素の開発
	51	15	③	親睦会	藤岡市平井公民館		サ-3	味噌づくり教室開催
	52	16	②	研修会	群馬SC	河合	イ-8	河合ゼミ読書会
	53	17	②	研修会	群馬県立図書館		アオ	講演　野の鳥は野へ

年度	連番	年度連番	大項目分類	大項目	場所	主催	記号	行事詳細
	54	18	②	研修会	渋川市民会館		アカ	研修会　チョウ類保全シンポ
	55	19	②	研修会	前橋総合福祉会館	中島	2-3	群馬淡水生物研究会
	56	20	②	研修会	群馬大学		アキ	野外生物学会シンポ
	57	21	②	研修会	高崎市箕郷公園	中島	2-4	調査　群馬淡水生物研究会
	58	22	②	研修会	群馬SC		アク-1	活動報告会
H20年度	59	1	②	研修会	桐生市立中央公民館		アケ	講演会　自然環境保護
	60	2	②	研修会	新治村湯宿	河合	ウ-4	第４回河合ゼミ研究大会
	61	3	②	研修会	群馬SC	河合	イ-9	河合ゼミ読書会
	62	4	②	公開講座	群馬SC		モ-6	公開講座
	63	5	②	公開講座	桐生市自然観察の森		アコ	ネイチャーガイド講習会
	64	6	①	研修会	藤岡市平井公民館	掛川	ロ-2	鮎川調査観察　水質、生物
	65	7	②	研修会	群馬高専青井研究室	河合	イ-10	河合ゼミ読書会
	66	8	②	研修会	神奈川県 箱根方面		アイ-2	学生研修旅行
	67	9	②	研修会	旧新治村役場		アサ	生物環境報告
	68	10	②	研修会	群馬SC	河合	イ-11	河合ゼミ読書会
	69	11	③	親睦会	藤岡市平井公民館		サ-4	沢庵漬け講習会
	70	12	②	研修会	群馬会館		アシ	環境カウンセラー　シンポ
	71	13	②	研修会	群馬SC	河合	イ-12	河合ゼミ読書会
	72	14	①	研修会	群馬SC	矢野	ト	矢野先生のおもしろ実験マイクロスケール
	73	15	②	公開講座	沼田ミニサテライト		モ-7	公開講座
H21年度	74	1	③	親睦会	群馬大学工学部桐生		アス	しだれ桜を見る会
	75	2	①	研修会	赤城　モロコシ山	松村	コ-1	ヒメギフチョウ観察会
	76	3	③	親睦会	群馬SC	白井	ス-1	やさしい宇宙旅行の話
	77	4	②	研修会	新治村	河合	ウ-5	第５回河合ゼミ研究大会
	78	5	②	研修会	群馬SC	河合	イ-13	河合ゼミ読書会
	79	6	①	研修会	藤岡市平井公民館	掛川	ロ-3	鮎川調査観察　水質、生物
	80	7	③	親睦会	群馬SC	白井	ス-2	スサノオとニギハヤヒ古代史を遊ぶ１
	81	8	②	研修会	群馬SC	河合	イ-14	河合ゼミ読書会
	82	9	②	研修会	群馬SC	川上	セ	フラワーアレンジメント
	83	10	②	研修会	群馬高専	青井	アセ	生物教育研究（里山）シンポ
	84	11	②	研修会	群馬SC	河合	イ-15	河合ゼミ読書会
	85	12	②	研修会	桐生市市民文化会館		アソ	防災研修会
	86	13	③	親睦会	群馬SC	白井	ス-3	スサノオの軌跡古代史を遊ぶ２
	87	14	①	研修会	小山市		アタ	永田魚道現地視察
	88	15	②	研修会	群馬SC	河合	イ-16	河合ゼミ読書会
	89	16	②	公開講座	群馬SC	河合紹介	アチ	トキの生息環境と農業　蘇雲山先生
	90	17	②	公開講座	川場村文化会館	河合	アツ	トキの生息環境と農業に関するシンポジウム
	91	18	②	研修会	群馬SC		アチ	研修会
H22年度	92	1	②	研修会	群馬SC		アト	研究発表会・リハ
	93	2	②	研修会	群馬SC		ケ	研究成果発表会
	94	3	①	研修会	赤城　モロコシ山	松村	コ-2	ヒメギフチョウ観察会
	95	4	②	研修会	群馬SC		アナ	研究成果発表会ビデオ試写会・反省会
	96	5	②	研修会	新治村	河合	ウ-6	第６回河合ゼミ研究大会
	97	6	③	親睦会	伊勢崎市　児島農園		アニ	イチゴ狩り農業の未来を考える現地見学
	98	7	②	研修会	鴻巣市立下忍小学校	川島秀	アヌ	環境学習参加　小学４年生84名
	99	8	②	研修会	国立科学博物館		アネ	研究者発表 「巻貝」長谷川和範先生
	100	9	②	研修会	藤岡市	掛川	エ-1	かんな川水辺の学校開校式
	101	10	②	研修会	群馬SC	河合	イ-17	河合ゼミ読書会
	102	11	②	研修会	鴻巣文化センター	河合紹介	アノ	「コウノトリと共に生きる～豊岡の挑戦」豊岡市市長 中貝宗治
	103	12	①	研修会	藤岡市	掛川	エ-2	観察会　かんな川水辺の学校開校式
	104	13	②	研修会	桐生市		アハ	桐生水辺の学校完成式典
	105	14	②	研修会	ジャパン・スネークセンター	掛川	エ-3	かんな川水辺の楽校　マムシ対策研修講座
	106	15	②	研修会	群馬SC	中澤	アヒ	環境の話　スウェーデン、デンマーク事情　中澤文雄

年度	連番	年度連番	大項目分類	大項目	場所	主催	記号	行事詳細
	107	16	②	研修会	群馬県藤岡市鬼石		アフ	有気農産物認定について　奥多野有機システム
	108	17	②	研修会	群馬SC	河合	イ-18	卒研研究発表リハ・研修会　河合ゼミ読書会
	109	18	②	公開講座	群馬SC		アヘ	石井学長、迫りくる財政破綻の危機―国の破産とは何か―
	110	19	②	公開講座	群馬SC	河合	アホ	卒業研究発表会報告
	111	20	②	研修会	群馬県庁		アマ	研修会　群馬県農林水産関係機関成果発表会
H23年度	112	1	②	研修会	みなかみ町	河合	ウ-7、イ-19	研修会　第７回河合ゼミ研究大会、読書会
	113	2	②	研修会	藤岡市美九里公民館	掛川	7	かんな川水辺の楽校運営協議会会議
	114	3	②	研修会	藤岡市美九里公民館		33	?
	115	4	③	研修会	ジオパーク下仁田	中島	アミ-1	親睦　ジオパーク認定記念現地観察会
	116	5	③	親睦会	群馬SC	白井	ス-4	第４回　古代史を学ぶ
	117	6	②	研修会	沼田サテライト		アム-1	土曜フォーラム
	118	7	②	研修会	群馬産業技術センター		アメ	植物工場セミナー　岡崎聖一放大卒
	119	8	②	研修会	群馬合金（株）境工場		アモ	工場見学環境の取り組み　MFCA
	120	9	②	研修会	ドーミーイン高崎		アヤ	ホテルチェーンのエネルギーモニタリング
	121	10	②	研修会	上野村役場・ペレット工場		アユ	森林バイオマスエネルギー循環
	122	11	②	研修会	（株）ミツバ新里工場		アヨ	省エネ取り組み　環境保全活動
	123	12	③	親睦会	群馬SC	白井	ス-5	最終講演
	124	13	②	研修会	埼玉SC	河合	イ-20	河合ゼミ読書会
H24年度	125	1	②	研修会	みなかみ町	河合	ウ-8	第８回河合ゼミ研究大会
	126	2	②	研修会	埼玉SC	河合	イ-21	河合ゼミ読書会
	127	3	②	研修会	群馬SC	所長	アラ	所長講演
	128	4	②	研修会	群馬SC		アム-2	第53回土曜フォーラム「多読」で英語
	129	5	②	研修会	佐渡市	河合紹介	アリ	生物の多様性を育む農業国際会議
	130	6	②	研修会	藤岡市美九里公民館	掛川	エ-4	かんな川水辺の楽校　昆虫標本の作り方教室
	131	7	②	研修会	藤岡市美九里公民館	掛川	エ-5	かんな川水辺の楽校観察会
	132	8	②	研修会	桐生市市民文化会館		アル	群馬大学地域貢献シンポ「身のまわりの放射線を正しく理解する」
	133	9	②	研修会	桐生市		アレ	重要伝統的建造物群保存地区見学
	134	10	②	研修会	みなかみ町	河合	アロ	ブータン・デー：もう一つの発展の可能性をブータンと共に考えよう
	135	11	②	研修会	藤岡市	掛川	エ-6	かんな川水辺の楽校公開講座 「植物観察」と「拓本作り」
	136	12	②	研修会	千葉県野田市	河合	イ-22、カフ	河合ゼミ読書会　コウノトリ飼育環境観察
	137	13	②	研修会	群馬県庁		アワ	群馬県農林水産関係成果発表会
	138	14	②	研修会	千葉県野田市	河合紹介	カア	第27回運河塾コウノトリ生き物と環境
	139	15	②	研修会	群馬SC		カイ	私の課題研究発表会（同窓会にて）
	140	16	②	研修会	群馬SC		アク-2	研修・活動報告会
H25年度	141	1	②	研修会	赤城　モロコシ山	松村	コ-3	ヒメギフチョウ観察会
	142	2	②	研修会	みなかみ町	河合	ウ-9	第９回河合ゼミ研究大会
	143	3	③	研修会	伊勢崎市島村		カウ-1	ふるさと学習会１
	144	4	②	研修会	高崎市倉渕町	廣瀬	カエ	ヤマアジサイ観察会（はまゆう山荘）
	145	5	②	研修会	群馬SC		カオ-1	加藤所長講演
	146	6	②	研修会	みなかみ町	河合	カカ	文化財保護活動
	147	7	③	親睦会	みなかみ町	河合	カキ	親睦・交流会
	148	8	②	研修会	東京都　高尾山		アイ-3	学生研修旅行
	149	9	③	研修会	伊勢崎市		カウ-2	ふるさと学習会２
	150	10	②	研修会	群馬SC		アム-3	土曜フォーラム　認知症から「豊かな老後を一緒に考える」
	151	11	②	研修会	東京理科大学　野田キャンパス	河合紹介	カク	「コウノトリと共生する」シンポジウム
	152	12	③	親睦会	群馬SC	河合	カケ	ブータン講師と学生による発表会・交流会
	153	13	②	研修会	桐生市　有隣館		カコ	シンポ「いきの文化～江戸と桐生」

年度	連番	年度連番	大項目分類	大項目	場所	主催	記号	行事詳細
H26年度	154	1	②	研修会	ジオパーク下仁田	中島	アミ-2	現地見学（ジオパーク下仁田）
	155	2	②	研修会	みなかみ町湯宿温泉	河合	ウ-10	第10回河合ゼミ研究大会
	156	3	②	研修会	群馬SC		アム-4	土曜フォーラム　幕末維新を生きた上州の情報人
	157	4	②	研修会	富岡市、下仁田町		カサ	世界遺産　富岡製糸絹遺産群（富岡製糸場・荒船風穴）現地見学会　学園祭準備
	158	5	②	研修会	藤岡市、伊勢崎市		カシ	高山社（藤岡）、田島家（伊勢崎）見学
	159	6	②	研修会	群馬SC		アム-5	土曜フォーラム　ブラックホール
	160	7	②	研修会	前橋市		カセ-1	茶席体験（陽仙亭自楽庵）
	161	8	②	研修会	群馬SC		アム-6	土曜フォーラム　蚕糸業の軌跡　世界遺産群
	162	9	③	研修会	ブータン王国	河合	テ	大学間交流　シェルブツェ・カレッジ訪問
	163	10	②	研修会	藤岡市	掛川	カス	川の通信簿（国交省高崎河川事務所）
	164	11	③	研修会	群馬SC		カソ	学園祭
	165	12	②	研修会	藤岡市	掛川	エ-7	かんな川水辺の楽校「昆虫の標本を作ろう」
	166	13	③	研修会	東京都		アイ-4	学生研修旅行（築地・歌舞伎座・相田みつを記念館）
	167	14	②	研修会	群馬SC	河合	カタ	研究発表及びブータン報告
	168	15	②	研修会	群馬SC		アム-7	土曜フォーラム　サクセスフル・エイジング
	169	16	②	研修会	東京文京SC	河合	カチ	環境研究会　講演とブータン報告
	170	17	②	研修会	群馬SC	河合	カツ	TPPの影響について
H27年度	171	1	②	研修会	赤堀芸術文化プラザ		カテ-1	日本舞踊観賞
	172	2	②	研修会	赤城　モロコシ山	松村	コ-3	ヒメギフチョウ観察会
	173	3	②	研修会	前橋 テルサ		カト	映画鑑賞　岡倉天心
	174	4	②	研修会	前橋市		カセ-2	茶席体験（陽仙亭自楽庵）
	175	5	②	研修会	藤岡市		カナ	工場・絹遺産群見学（富士製作所・高山社）
	176	6	②	研修会	藤岡市	掛川	エ-8	かんな川水辺の楽校・昆虫採集
	177	7	③	研修会	群馬SC		カニ	放送大学群馬30周年記念式典・特別講演・学園際
	178	8	②	研修会	藤岡市美九里公民館	掛川	エ-9	かんな川水辺の楽校・竹とんぼ作り
	179	9	②	研修会	群馬SC	松村	カヌ	チョウの話　松村栄行先生
	180	10	②	研修会	藤岡市美九里公民館	掛川	エ-10	かんな川水辺の楽校・チョウの標本作り
	181	11	②	研修会	川場村文化会館	河合	13-1	第１回真田用水研究会
	182	12	②	研修会	群馬SC		アム-7	土曜フォーラム　自然災害関連
	183	13	③	親睦会	前橋市		カネ-1	若宮クラブと共に
	184	14	②	研修会	伊勢崎市		カノ-1	早朝倫理セミナー　講演者　会員藤生幹雄
	185	15	②	研修会	東京文京SC	河合	カハ	ブータン研究会　講演・国際交流
	186	16	②	研修会	みなかみ町	河合	13-2	第２回真田用水研究会
	187	17	②	研修会	群馬SC	河合	ハ	トルコ活動報告・懇親会（里見洋司）
	188	18	②	研修会	群馬SC		カオ-2	加藤所長最終講演会等
	189	19	②	研修会	前橋市		カオ-3	加藤所長　送別会
H28年度予定	190	1	③	研修会	群馬SC		カヒ-1	入学者の集い
	191	2	②	研修会	赤堀芸術文化プラザ		カテ-2	日本舞踊観賞
	192	3	②	研修会	藤岡市美九里公民館	掛川	エ-11	かんな川水辺の楽校
	193	4	②	研修会	赤城　モロコシ山	松村	コ-4	ヒメギフチョウ観察会
	194	5	②	研修会	伊勢崎市		カノ-2	早朝倫理セミナー　相澤忠洋の岩宿発見以後　相澤忠洋記念館見学
	195	6	②	研修会	前橋市		カセ-3	茶席体験（陽仙亭自楽庵）
	196	7	②	研修会	群馬SC		カヒ-2	サークル代表者会議
	197	8	②	研修会	沼田サテライト	河合	13-3	真田用水研究会　講演　丑木幸男
	198	9	②	研修会	藤岡市美九里公民館	掛川	エ-12	かんな川水辺の楽校・観察会
	199	10	②	研修会	群馬SC		カヒ-2	入学者の集い　サークル紹介
	200	11	②	研修会	みなかみ町	河合	13-4	真田用水研究会
	201	12	②	研修会	みなかみ町	河合	イ-23	河合ゼミ研究大会
	202	13	③	親睦会	前橋		カネ-2	若宮クラブと共に
	203	14	②	研修会	群馬SC		カヒ	総会

（出所：「生物研究会創立十周年記念誌」から筆者作成）
■は、「生物研究会10年誌」作成時点での予定行事